

【翻訳注解】

## ガレノス『胚子の形成について』 —古典ギリシア語原典からの翻訳と注解—

今 井 正 浩

### 序 言

ガレノス (Galenos, 129–c.216 AD) は、ローマ帝国のアジア属州の主要都市ペルガモン (Pergamon) 出身の医学者で、ヒッポクラテス (Hippokrates, c.460–c.375 BC) とともに、西洋古典古代の医学を主導した人物の一人である。ガレノスは、当時、建築家として高い名声を得ていた父親ニコン (Nikon) の教育指導の下、諸学派の哲学を学んだ。医学に専念することになった背景には、父親が夢の中で医神アスクレピオス (Asklepios) のお告げを受けたことによると伝えられている。ガレノスは小アジアやギリシア本土の著名な医師たちに師事して、医学の研鑽を積んだ後、ヘレニズム期以降、医学研究の最重要拠点として発展してきたナイル川河口の都市アレクサンドレイア (Alexandria) に数年間滞在して、当時の最新の外科技術を習得した。その後、故郷のペルガモンに戻り、その地の剣闘士の治療医として活躍した。162年にローマに赴き、諸学派の医師たちとの論争や解剖の実演等を通して高い名声を博した。この名声によって、ストア派の哲人として名高いローマ皇帝マルクス・アウレリウス・アントニウス (Marcus Aurelius Antonius, 121–180 / 在位期間 161–180) の侍医の一人として宮廷に仕えるなど、当時のローマ社会において大きな成功を収めた。

十九世紀に刊行された C. G. Kühn (ed.), *Claudii Galeni Opera omnia*, 20 Bde (Leipzig, 1821–1833) は、医学の各領域に関する論考を中心として、きわめて多岐にわたるガレノスの著作の全体像を把握するための第一級の資料として、現在も価値を失っていない。ここに発表するのは、医学の特定諸領域のうち、発生学 (embryology) の領域に関するガレノスの論考の一つ『胚子の形成について』 (περὶ κουμένων διαπλάσεως) の古典ギリシア語原典からの日本語への翻訳と、論考全体への注解である。ガレノスが、医師としてのキャリア形成の最初期の段階から、発生学の領域に対して非常に深い関心を寄せていたという点については、彼の著作の随所にヒトの生殖発生等に関連する論及が数多く確認されるという事実から十分に裏付けられる。その一方で、ヒトの生殖発生について主題的に論じた論考として、今日まで伝わっているものとしては、本論考のほか、いわゆる生殖物質としての「精液」(スペルマ) の自然本性とその働き等について論じた『精液について』

(περὶ σπέρματος) のみである<sup>1</sup>。これらの論考の成立時期については、『精液について』が169年以降、ガレノスの第二次ローマ滞在中に執筆されたのに対して、『胚子の形成について』は、晩年にあたる193年から199年（または209年）の間に執筆されたとする見方が有力である<sup>2</sup>。以上の見方が正しいとしたら、『精液について』が執筆されてから『胚子の形成について』が執筆されるまでの間に20年が経過していると推測することができる。事実、両論考中でガレノスが提示している見解には、いくつかの点において、大きな相違が確認される<sup>3</sup>。

『胚子の形成について』は、全六章で構成されている。以下、本論考全体の構成と内容について、大づかみに解説しておきたい。

第一章では、胚子の形成について論述してきた医学者たちや哲学者たちの主張が、いずれも解剖にもとづく知見に依拠していないという理由で批判される。そのような状況において、観察による事実をもとに胚子の形成について論じた最初の人物として、ヒポクラテスが高く評価されている。自らの評価を裏付けるために、ガレノスは、「ヒポクラテス医学文書」(Corpus Hippocraticum)として今日に伝わる医学論考のうち、『生殖について』・『子供の自然本性について』・『疾病について』第IV巻から構成されている一連の論考の第十三章の相当部分を引用している<sup>4</sup>。

第二章では、先ず胎児を包む「胎膜」(コリオン)が形成され、その内側に静脈と動脈の最初の形状が生成していくプロセスについて説明される。この説明の中で、ガレノスは、胎児に属する器官にあたるものとして「尿管」尿管「尿膜」および「羊膜」にも言及している。ガレノスが特に関心を寄せているのは、形成中の胚子の体の内部に血管系組織が形成されていくプロセスである。ガレノスの説明によれば、これらの血管系組織は「臍帯」内の四本の血管(二本の「臍静脈」および二本の「臍動脈」)に接続していて、それを通して、母体からの血液が胎児の体を形成するための素材やそれを養うための栄養として運ばれてくるとされている。

第三章では、胎児の体内に主要な諸器官が段階的に形成されていくプロセスが説明される。ここで重要なことは、胎児の体の諸器官のうちで最初に生成するのは肝臓であって、肝臓につづいて心臓が生成し、脳が生成するのは第三段階においてであるとされているという点である。肝臓が心臓

<sup>1</sup> これらの論考のほかにも、『七か月児について』(*De Septimestri Partu*)と題する論考も、発生学の領域に属するものとして位置づけることができる。だが、この論考については、その大部分がアラビア語訳で伝わっているのみである。この論考については、R. Walzer, Galens Schrift „Über die Siebenmonatskinder“, *Rivista degli Studi Orientali* 15, 1935, SS. 323–357 を参照。

<sup>2</sup> 『精液について』の成立時期については、Phillip De Lacy (ed.), *Galen De Semine*, Corpus Medicorum Graecorum [CMG] V 3,1, Akademie Verlag (Berlin, 1992), p.47 を参照。これに対して、『胚子の形成について』の成立時期については、Nickel, 後掲書 S. 44 を参照。

<sup>3</sup> 『精液について』第一巻第八章では、心臓は発生の最初期において生成するとされていたのに対して、『胚子の形成について』第三章では、心臓は肝臓が生成した後に生成すると修正されている。

<sup>4</sup> R. Joly (éd.), *Hippocrate, Tome XI: De la génération, De la nature de l'enfant, Des maladies IV, Du foetus de huit mois*, Collection des Universités de France (Paris, 1970), pp.55–56 を参照。

よりも先に生成してくるものの論拠として、ガレノスは、発生の最初期において、胎児は植物と同じように「栄養的魂」のみによって管理されているので、この段階で心臓は必要でないという点を挙げている。これらの主要三器官の生成の順序とそのプロセスについての説明は、胎児の体の諸器官のうちで心臓が最初に生成した後、心臓の生成にともなって脳が形成されるとしたアリストテレス (Aristoteles, 384–322 BC) の見解と対照的である<sup>5</sup>。

第四章では、(ア)胎児の体の諸器官のうちで最初に生成するのは心臓である、(イ)心臓がその他の器官を形成する、(ウ)心臓が唯一、体の全器官を支配する指導的部分にあたるとするペリパトス派やストア派の見解に対して批判が展開される。ペリパトス派やストア派は(ア)と(イ)を(ウ)の妥当性を論証するための前提として用いているとされる。しかし、ガレノスによれば、(ア)と(イ)はいずれも解剖学上の裏付けを欠いた、憶測のみにもとづく誤った見解であるため、(ウ)の妥当性の論拠にはなり得ないとされている。

第五章では、心臓を体の唯一の指導的部分として位置づけたペリパトス派やストア派の「心臓中心主義」(cardiocentrism)に対して、脳、心臓、肝臓が体の三つの主要な器官として、相互に連携しながら、それぞれに固有の働きを担うとするガレノス自身の見解が示される。ガレノスによれば、脊髄と神経系組織が脳に起始を持つものに対して、動脈が心臓に起始を持つことは、これらの伝達路のいずれかを人為的に遮断することによって、一方が機能不全に陥るのに対して、もう一方は何の影響も被らないということから十分に裏付けられるとされている。

第六章では「胚子を形成する原因にあたるものは何か」という根本的な問いをめぐって検討が進められる。胚子形成の原因とされるものをめぐって、ガレノス自身は、(a)「精液中の魂(プシューケー)」「すなわち「栄養的魂」)、(b)「理知的魂(ロギケー・プシューケー)」、(c)「全宇宙に浸透している魂」(いわゆる「宇宙靈魂」)等をその候補にあげているが、この問いに対して最終的な回答を与えることについては留保している。

『胚子の形成について』全体の構成と内容については、以上の通りである。そこから判断すると、本論考は、つぎの三点を重要な論点としていると考えることができる。すなわち、(1)人体の構造と働きについては、プラトン (Platon, 427–347 BC) のいわゆる「魂の三部分説」に基づく人体理解を前提としていること、(2)ヒトの生殖発生の仕組みをめぐっては、ヒッポクラテスの考え方に基本的に依拠していること、(3)「心臓中心主義」に基づくペリパトス派やストア派の発生理論に対しては、これらに抜本的な修正を迫るという考え方に立って、最新の解剖学的知見を活用することによって、自らの発生理論を展開していることである。

ヒトを含む動物の生殖発生をめぐる議論は、初期ギリシアの哲学者たちによる「自然探究」の一

<sup>5</sup> 「それゆえ、すべての有血動物において、最初に明瞭に分化したかたちをとって現れるのは、心臓である」(アリストテレス『動物の発生について』第二巻第四章 740a17–18)。同書第二巻第一章 735a23–26 等を併せて参照。

環としての生物学への深い問題関心に端を発していると言うことができる。この議論は、前五世紀後半から前四世紀後半にかけて、ヒポクラテスとアリストテレスの登場によって大きな展開を遂げた。ガレノスの発生理論も、基本的には、古代ギリシア哲学・思想史の最初期に端を発する議論の歴史の延長線上に位置づけられるものとして理解する必要があるというわけである。

翻訳にあたっては、Diethard Nickel (ed.), *Galen De Foetuum Formatione*, Corpus Medicorum Graecorum [CMG] V 3, 3, Akademie Verlag (Berlin, 2001) を底本として用い、ガレノス研究史の慣例に従って、先述の Kühn 版の巻およびページを訳文の左側に表記するとともに、訳注で本論考およびガレノスの他の論考の個所を示す場合にも Kühn 版の巻およびページを表記した。訳文中に〔 〕で示した個所は、訳者自身が補った部分である。また、古典ギリシア語の原語については、必要に応じて、訳文中の( )内にカタカナで表記している。

## ガレノス 胚子の形成について

### 第一章

**IV 652** 胚子 (1) の形成について記述することを試みてきた医学者たちも哲学者たちも、自分自身が主張していることの出発点を解剖にもとめるということが全くなかった (2)。したがって、かれらが真実を把握し損なっていて、何らかの点で相互に意見に食い違いを見せているとしても、驚くには全くあたらない。というのも、注意深く解剖を実施してきた人々にとってすら理解されていない事柄がいくつも存在しているのだから、解剖にもとづいて明らかにされた事柄に依拠することなしに、自分自身の推測を信頼してきた人々が〔真実を〕把握し損なうというのは、至極当然のことだからである。

**653** ヒッポクラテス (3) は、わたしたちが知っている人々の中で、胎児の形成に関する記述を真実に適った仕方で行った最初の人物である。ヒッポクラテスは、調査から結論にあたるものを導き出すのに、理論にもとづく推測に依拠するのではなく、感覚によって得られうる認識に依拠したのであって、しかも、これらの〔感覚的〕認識のごく少数のものみに依拠したわけではなかった——これはすなわち、ある人々がたった一度か二度確認されたに過ぎない事柄をもとに、そこから普遍的な言明を作り出したのとは異なっている。ところが、今日においても、医者によっては、三十二日で〔流産によって母体の〕外に産み落とされた胎児が、明瞭に形成された体の輪郭をすでに備えているのを一度だけ見たという理由で、ヒッポクラテスが〔書物の中で〕述べている意見については、これを一度も読んだこともなく、まして、以上の事柄について探究を進めてきた、そのほかの人々が述べている意見についても読んだことがないまま、「すべての胎児の場合にそうである」という意見を表明する者もいるわけである。〔だが、この意見は間違っている〕。というのも、〔胎児の体が〕明瞭に形成されることについても、〔胎児が〕運動を始めることについても、体外に産み出されることについても、その限界は胎児にとって〔時期的に〕一つに定められているわけではないのだから。むしろ、ヒッポクラテスや、かれ以降、最も信頼に値する人々によって記述されてきたことによれば、全般的に言って、事情はつぎのとおりである。

『子供の自然本性について』と題する書物 (4) の著者——この著者がヒッポクラテス自身であるか、あるいはかれの弟子ポリュボスであるかはともかく (5)——は、生殖液 (6) が〔子宮に入ってから〕六日目に〔母体の〕外に落ちてきたところを観察した上で、以下の章節において、〔それを〕厳密であると同時に明瞭なかたちで詳述している (7)。

**654** 「さて、わたしは、生殖液が子宮内に六日間留まってから〔母体の〕外に落ちてきたところを自分自身の目で確かめたので、それが自分の判断力をとおして、わたしにどのようなものに見

えたか〔を述べ〕、それらの事柄から、残りの証拠を引き出すことにしよう。どのようなわけで、わたしが〔子宮に入って〕六日目の生殖液を見ることになったのかを詳しく述べることにしよう。ある婦人に奴隷として仕えていた女に、男たちのもとに頻繁に通っていた名高い歌手がいたが、この女は自分の名声を下げないようにするために、子を身ごもるのを避けなければならなかった。この歌手は、女たちが互いにつきのようなことを話しているのを聞いたことがあった。すなわち、女が子を身ごもることになる場合、〔子宮に入った〕生殖液は、体外へ出てこないで、そこに留まるということである。そのことを聞いてから、女は〔男たちと〕一緒になるときには、常にそれに気をつけていた。そして、女は何かのきっかけで、生殖液が体外に出てこないことに気づき、それを女主人に告げたところ、その話がわたしの所に伝わってきたというわけである。そこで、わたしは〔この女の話〕聞いてから、彼女に向かって「尻蹴り跳び」(8)をするように促した。そこで、女はすでに七回も跳躍を繰り返したところ、生殖液が地面に流れ落ちて、音を立てた。すると、女はそれを見て驚いたというわけである。それがどのようなものであったかを、わたしは以下に述べよう。それは、生卵から卵の外側の殻の部分を取り除いたとき、殻の内側にある被膜を通して、中の液体が透けて見えるような、そのようなものであった。真実を言えば、何かそのような特徴を示していた。その一方で、それは赤くて丸みを帯びていた。被膜を通して、その中に白くて太い繊維状のものが濃厚で赤い漿液と一緒に包み込まれているのが見え、被膜の外側には血の塊が付着していた。〔被膜の〕真ん中に細いものが突き出していて、わたしには、それが臍（へそ）であって、最初のうちはそこを通して息を吐いたり吸ったりするように思われた。また、被膜全体はそこを起点に伸び広がって、生殖液を包み込んでいたのである」

## 第二章

以上の説明の中で「生殖液を包み込んでいる被膜」というのは、「胎膜」と呼ばれているもの(1)のことであると考えるべきである。「胎膜」は「白くて太い繊維状のものを、濃厚で赤い漿液と一緒に」それ自体の中を含んでいる。〔ここで「白くて太い繊維状のもの」というのは〕これから生成してくる静脈と動脈の下地（ヒュボグラペー）にあたるものである。現に、胚子は成長している間、その全期間を通して、静脈と動脈で充実した「胎膜」に包み込まれているのが確認されている。すなわち、胚子の本質的あり方(2)を構成しているものは、これらの三要素(3)のほかに何もなし、むしろ〔そこでは〕おびただしい数の静脈と動脈が、全体が繋がった薄い膜状の物体(4)によって周りを囲まれて束ねられた状態で、互いに隣接して、伸び広がっているというわけである。ヒトの自然本性(ピュシス)からさほど遠くない動物——  
656 ——たとえば、ヤギ、ヒツジ、ウシ、ウマ、ロバがそうである——が子を孕んでいる状態で〔子宮を〕解剖する(5)と、この「胎膜」が、複数の動脈および静脈を介して、子を孕んでいる動物の子宮に合着しているのが見える。これらの脈管の生成の起始(アルケー)にあたるのは〔子を

孕んでいる動物の〕子宮の動脈と静脈であって、これらの動脈と静脈の先端は子宮〔本体〕の内側の場所に向かって開口している。そうであるなら、胚子はこれらの脈管を通してのみ、子を孕んでいる動物(6)に結合していることになる。というのも、「胎膜」はそのほかのいずれの場所にも開口部を持っていないし、これらの脈管のみで子宮に合着しているほかに、どこかの場所で子宮に合着しているということもない(7)からである。その一方で、これらの脈管の間で「膜」が窪んだ部分は、その内側から子宮の下に伸び広がっているものの、子宮に合着することなしに、そこに接触しているだけである。

「胎膜」から出ている脈管は、現に、きわめて狭い起始(アルケー)を持っていて、そこを通して、これらの脈管は、わたしが先に述べたように(8)、子宮から生えている脈管の先端と一つに結合している。その一方で、これらの脈管は、子宮から離れていくにつれて、植物の根ときわめてよく似た方式で、互いに合わさっていく。というのも、植物の場合も、多数の細い根の先端が互いに合わさって、そこからもっと太い別の根が生まれてくるし、今度はそれらの根が一つに合わさって、そこからまた〔もっと太い〕別の根が〔生まれてくるの〕であって、**657** 最終的にすべての根が幹の先端に繋がって終わるまで、この過程がずっと続いていく。これと同じ方式にしたがって、「胎膜」の動脈や静脈も細いものが互いに合わさって、それら自体よりも口径の大きい別の動脈や静脈を形成し、それらの動脈や静脈が互いに合わさることによって、そこから〔もっと口径の大きい〕別のものが生まれてくる(9)し、さらに、そのようにして生成した動脈や静脈が今度は互いに一つに合わさって、そこからほかのものが(10)〔生まれてくるの〕であって、以上のことを何度もくりかえした後、個々の脈管どうしの結合(シュノドス)は、一方では二本の動脈へ、もう一方では二本の静脈へと繋がっていく(11)。それらの真中には一本の管(ポロス)が生じていて、胚子の膀胱の底部に向かって開口している。この管は解剖の手腕に長けた人々が「尿管」(12)と呼んでいたものである。この管の反対側の口は、これらの四本の脈管(13)が分かれていくにつれて、少しずつ広がって行って、形状が腸詰に似た、薄い被膜を形成している。この被膜は、胎児を包み込んでいる、別のそのような被膜の外側に伸び広がっている。これらの二種類の被膜に対して、解剖を専門としている人々は〔それぞれに固有の〕名称を付している。すなわち、一方の被膜に対しては、その形状をもとに「尿管」(14)という名称を付したのに対して、胎児を包み込んでいる、もう一方の被膜に対しては「羊膜」(15)という名称を付したというわけである。さて、胚子の外側に位置しているものについては、以上の通りである。

胎児それ自体には、それに特有の部分というものが存在している。すべての部分の中で第一のものにあたるのは皮膚であって、これは胎児にとっては生来の保護物および衣服として、胎児**658** を製作したもの(16)によって形成された。さらに、この皮膚に続いて、この皮膚の内側で四本の脈管(17)に繋がっている〔体の〕諸々の部分がそれにあたる。それらのいかなる部分も、「胎膜」のすべての脈管が先に述べた四本の脈管へと繋がっていくまでは形成され得ない。という

のも、胚子の〔体の〕おのおのの部分は、それが最初に生成する段階においても、その後の全期間にわたって管理される段階においても、それに適した栄養（トロペー）を明らかに必要としているからである。しかし、胎児にとって栄養にあたる素材（ヒューレー）は、子を孕んでいるもの（18）から胎児へと供給されるもののほかにあり得ない。したがって、胎児の〔体の〕いかなる部分も、血液状の実体なしには生成し得ないというわけである。

しかし、その一方で、〔胎児の体の〕諸々の部分のうち、およそ白色で血液を欠いているものが、肝臓〔という臓器〕の実体と同じように、血液それ自体から生成するということもあり得ない。これに対して、この〔肝臓という〕臓器は、その物体としての本質的あり方が血液にもっとも似ているという理由で、血液を〔生成の〕素材として、もっとも速やかに生成してくるというわけである（19）。というのも、動物の脈管を切開して、〔そこから〕流出してくる血液の一部を適温のお湯の中に落とすと、血液は凝固していつて、肝臓の本質的あり方に近い状態を呈するからである。さて、それゆえ、この臓器は、子宮という物体に包み込まれているという、ただそのことによって、以上の作用をこうむる（20）と、自ら進んで凝固するというわけである。だが、〔胚子の体の〕ほかの部分のうち、およそ肉質状をしていて、血液を含んでいるものは、おのおのが生成するのにもっと多くの時間を要する（21）。これに対して、動脈と静脈という物体は血液をまったく欠いているので、それは最初の生成において、子宮にいたる脈管の先端に接続してから、「精液」（スペルマ）の実体〔を素材として、それ〕から生成してきたということは理に適っている（22）。なぜなら、それが〔胚子の体の〕部分として、以上のような形状（イデアー）を自ら進んで、またもっとも容易に形成したのは、それ自体の本質的あり方が多くの粘着性を持っていることによるからである。

〔胚子の体の〕脈管が子宮に達している脈管の開口部へと最初に根付いた後、これらの脈管を形成した「精液」（スペルマ）（23）が、子宮から血液を引き寄せることによって、これらの脈管に栄養（トロペー）を供給し、そのような仕方、最初に生み出された脈管〔の通路を〕少しずつ広げていき、それらを成長させることによって長く伸ばしていくとともに、複数の細い脈管を同じものへ徐々に結合させることによって、もっと〔通路の〕広いものを生み出していくのは、おそらく理に適っていると思われる。さて、〔胚子の体の〕脈管と被膜が、このような仕方「精液」（スペルマ）の実体からその最初の成り立ち（シュスタシス）を獲得する一方、  
660 それに続いて、長さや幅を増していくことによって生み出されていくというのは、理に合ったことである。それはちょうど、樹木の場合に、幹の起始から残りの部分が上の方へと向かって伸びていつて、〔そこから〕何本もの枝に分かれていく様子（24）をわたしたちが見るのと同様である。さて、以上のことが、これに続いて順を追って述べる事柄において、いわゆる礎石にあたるものとして措定されたことにしよう。

### 第三章

これらに続いて、胚子が「精液」(スベルマ)の能力(1)によって、その全体にわたって順を追って、どのような仕方で形成されていくのが理に適っているかということ、解剖をもとに観察される事実を再び発見の出発点(アルケー)とした上で、考察することにしよう。すなわち、先述した四本の脈管(2)は「臍の緒」という名称で呼ばれているものを「尿管」に対応する管(3)と同時に形成しているのであるが、そのうちの一组は、それが胚子の〔体の〕皮膚を通過すると同時に、ただちに一つにまとまって、一本の太い静脈を生み出した後、肝臓の中へと生え込んでいるのが見える。わたしが「〔肝臓の中へと〕生え込んでいる」という言葉を用いるのは、解剖にもとづく〔この静脈の〕形状(イデアー)を言葉で伝える〔としたら、そのような言葉が適している〕というわけである。というのも、〔この静脈が生じるよりも〕先に肝臓がすでに存在していて、この静脈がその中へ「生え込んでいる」という意味では決してないからである。むしろ、事情はそれと正反対であるというのが、理に適っている。「臍の緒」に対応する静脈が〔胎児の体の皮膚を〕内側に向かって通過すると、樹木の幹がそうであるのと同じように、最初に二本に分岐する一方で、その部分のおおのが、樹木の場合に〔幹が〕

661 複数の枝に分かれていくのと類比的な仕方で、多数の支脈を形成していく。つづいて、〔二本に〕分岐した静脈のうち的一方の部分に密着して、先に述べた肝臓の実体(4)に対応する肉質が生成してくるのに対して、もう一方の部分(5)は腸間膜(6)を生み出すとともに、その部分に密着して、胃、脾臓、また何重にも折れ曲がった腸の構造全体(7)、大網(8)、および「直腸」と呼ばれているもの〔が生成してくる〕が、確かに、これらの臓器が存在するようになるのも〔かの静脈が二本に分岐するより〕以前ではなく、それらが生み出されるのは、かの静脈が〔二本に〕分岐していくのと〔時間的に〕一緒であって、それはちょうど、肝臓の実体が一本一本の静脈ごとに固有の仕方で、おのおのの静脈を囲い込んで生成してくるだけでなく、すべての静脈に共通する仕方で、それらを外側から囲い込んで生成してくるし、それと同時に〔肝臓という〕臓器の一つの形状(イデアー)を目指して形成されてくるのと同様である。

けれども、〔二本の臍〕動脈もそれと同じようになっていて、〔胚子の体の〕皮膚を内側に向かって通過した後、すぐに、それら自体を囲い込んで生成してきた何か別の実体を持つということもないし、また多くの部分に分岐するということもないし、むしろ、それらは広い範囲にわたって二本のままに留まっていて、胚子の膀胱を包み込むとともに、それに固定されて、下のほうに向かうと同時に体の奥のほうに向かって走って行って、最後には「幅広で神聖な骨」という名称で呼ばれているもの(9)に達している。そこから下のほうには、二本の動脈が〔左右〕それぞれの側に一本ずつ走っていて〔左右両側の〕脛に達している。これらの〔二本の〕

662 動脈は、背骨に接して走っている最大の動脈から分岐したものであって、この最大の動脈は心臓の左心室に接続しているのが見える(10)。

肝臓の生成に関しては、調査の対象となるものは〔これ以上〕何も残されていないのである

が、心臓に関しては、事情は〔肝臓の場合と〕決して同じではないように見える。というのも、肝臓は「臍の緒」から発している静脈が多様に分岐したもののうちの一方の部分に密着し、それらの静脈の間を埋めたり、囲い込んだりすることによって生成してきたというわけである。これに対して、心臓には、それがそこから生成することになる素材（ヒューレー）にあたるものが、子を孕んでいる動物（11）のもとから、〔胚子の〕動脈を通して供給されるか、あるいは〔胚子の〕肝臓の真ん中を通過して、この臓器よりも上に位置する〔体の〕諸部分が生成することを目的として、そこから上のほうに向かって走っている静脈（12）を経由して供給される必要がある（13）。〔心臓が形成されるためには〕長い時間を要するはずであって、肝臓が生成し始める最初の数日間と時期を同じくして、直ちに〔心臓が生成し始める〕ということはない。〔一方、肝臓が最初の数日間に生成し始めるのは〕これが子宮の本体からわずかしか離れていないためである。〔子宮に入ってから〕六日目の生殖液に関して、ヒポクラテスが「胎膜」の中に「丸みを帯びた、赤いものが見える」と語っていたものは、いまだ未分化で、はっきりとした形状をもたない状態の肝臓にあたるものではないかと考えられる（14）。現に、三十日をこえて流産した胎児においては、動物の〔体の〕つぎの三つの部分がお互いに近い場所に〔生成しているのが〕はっきりと見える。〔三つの部分というのは〕肝臓と心臓と脳のことである（15）。肝臓

663 はほかの两部分よりも大きいものに対して、心臓と脳は、大きさという点では、肝臓にはるかに後れをとっている。けれども、どの時点で心臓が最初に形成され始めるのかを発見するということは不可能である。というのも、〔母体が妊娠して〕最初の一月の間に起こる流産も〔その点について〕明確なことを何も教えないし、またヒトに似ている動物の解剖（16）にしても、事情は同じであって、胚子がいまだ未分化な状態にあるうちは、それ自体として何一つ確実なことを明らかにしないのである。しかし、〔胚子の体が〕分化し始めた後は〔体の〕そのほかの部分の大多数は〔いまだに〕明確な輪郭を持たないのに対して、以上の三つの部分のみは、少し前に述べたように、お互いに近い場所に〔生成しているのが〕観察される。〔三つの部分というのは〕心臓と脳と肝臓のことである。

当初、『精液について』と題する論考を執筆中に、〔胚子の体の〕各部分の形成の時間的順序についても何か語らざるを得なかったとき、わたしはつぎのように主張した。すなわち、心臓は肝臓と同じように、妊娠して最初の数日の間に〔すでに〕生成の礎のようなものを獲得しているということである（17）。以上の推論（ロギスモス）にわたしが導かれたのは、完成にいたった動物において心臓の用途がもっともきわだっているという事実によるものである。しかし、ほかのすべての医学者たちと哲学者たちも「〔体の各部分が〕明確に分化していくまでは、胚子  
664 は植物と同じような仕方で管理される」という見解に立っている（18）のを発見したとき、〔胚子の〕生成の最初期には心臓には何の用途も存在しないのであるから、心臓は全面的に肝臓よりも後になって形成されるというのが、わたしにはより説得的であるように思われたのである。そこで、わたしは心臓がどのようにして生成するのかということを探究した。すなわち、つぎ

の二つのうちのいずれかであることが必然的であるというわけである。つまり、(ア) 肝静脈 (19) が生成するのと同時に、血液が肝臓から上に向かって流れていくことによって、心臓もその血液をもとに生み出されるのか、あるいは、(イ) 大動脈は、エラシストラトス (20) が考えているように、「氣息」(21) のみを含んでいるのではなく、大動脈それ自体が血液を含んでいて、大動脈を通して〔血液が上に向かって流れていくことによって、心臓もその血液をもとに生み出されるの〕かのいずれかでなければならない。

ところで、多くの人々が、その中でもとくに哲学者たちが〔胚子の体の形成について〕誤りを犯してきたのは、動物の解剖によって明らかにされた事柄をかれらは何も知らないのであるから、無理からぬことである。これらの〔解剖において明らかにされた〕事柄のうちでとくに有益であるのは、体の奥深くに存在している部分の解明を目的として、生きている動物を対象とした解剖を専門技術に適った方法で実施することによって得られた事柄にほかならない (22)。したがって、この〔胚子の体の形成という〕課題に関する論述も、その内容を全体にわたって学問的な仕方ですべいたいと考える人々にとっては、長いものになる。というのも、わたしは、呼吸の用途について考察した論考を執筆しているし、それに加えて、動脈および動脈に生じる

665 脈拍の用途に関する別の論考も執筆しているからである (23)。これらの論考によって〔この課題に〕取り組んだ人は、つぎのことを理解することだろう。すなわち、生成の最初期において、胚子は動脈にしても、脈拍にしても、また、心臓にしても、それらの用途を必要としていないのであって、それはちょうど植物〔がそれらの用途を必要としていないの〕と同様であるということである。そして、もちろん、植物の生成についても、あらかじめ調べておくべきである (24)。というのも、植物〔の生成〕にとって必要であるものを前提として、胚子が植物と同じように、単一の魂 (25) によって管理されている間、胚子がいかなる種類のもを必要としており、いかなる数のものを必要としているかを理解することも (26) 可能になるからである。もっとも、この魂について考察することが当面の課題ではない場合、わたしたちは、この魂のことを、あらゆる実体に共通する呼称を用いることによって、「自然」(ピュシス) という名称で呼ぶことにしよう。この呼称は、クリュシッポスおよびかれの一派の人々が厳密な考察においても堅持してきたものである (27)。これに対して、〔この魂のことを「自然」という名称で呼ぶことは〕アリストテレスおよびプラトンが、そこから離れた上で、両者ともに〔これを〕「魂」という名称で呼んだのとは異なっている。ただし、この魂に対して、アリストテレスが「栄養摂取のための」という限定を付して〔「栄養摂取のための魂」という名称で呼んだ〕 (28) のに対して、プラトンは「欲望的な」という限定を付して〔「欲望的魂」という名称で呼んだ〕 (29) というわけである。それゆえに、現在、わたしたちによって進められている論述が、何かほかのことについて、前もって考察する場合のように、〔たんに〕副次的な作業を対象としたものではなく、むしろ、究極の厳密さを目指して仕上げられるものである以上、わたしたちは、植物がどのように生成し、どのように管理されるのかということをもまず先に、わたしたち自身

に思い起こさせることにしたい。というのも、植物は〔魂の〕「気概的部分」も「理知的部分」も持たない(30)ため、それがどのように生成し、どのように管理されるのかということには〔何かほかのものが〕混じることもないし、それだけで自立していることになるので、植物がどのように管理されるのかということをめぐることは、それを純粹で真正な仕方で見出すということに希望が持てるというわけである。

そこで、植物の生成に関しては、適度に湿っていて温かい土壤に蒔かれた種子（スペルマ）を思い起こすことによって、わたしたちは、もう一度、その始まり（アルケー）を定めるべきである。種子にあたるものとしては、樫の木（ドリユース）の種子か、またはそれ以外の植物で、高木になるものの種子が相応しい。なぜなら、体の大きいもののほうが、それを管理している自然の活動(31)観察することがもっと容易になるからである。この〔大地に蒔かれた〕種子からは二つの分岐物（32）が生え出してくるのが、ただちに見てとれる。すなわち、土の中に向かって下へ伸びていくものと、地面から出て、空気のほうへと近づいていく、それとは別のものであるというわけである。これらの〔二つの〕分岐物は、少なくとも〔生成の〕最初の段階においてはか細いけれども、時間が経過するにつれて〔次第に〕太くなっていくと同時に長く伸びていって、そして注目に値するほどの大きさに達すると、複数の分岐物に分かれていく。そして、もちろん、それらの分岐物それぞれ自体が再び別のものへと分かれていって、さらにそこから別の分岐物へと分かれていく過程で、以上の時間のうちの各段階において、それらの分岐物はすべて〔自然（ピュシス）によって〕養われると同時に、成長を遂げていくのであって、さらには植物が完成されると同時に、それらの先端には果実（カルポス）が実ることになるというわけである。

667 胚子は、その最初の生成〔の段階〕において植物と同じように管理されることから、〔生成の〕最初の時期においては、当然のことながら、ほんのわずかししか成長しない。ところが、〔体の諸部分が〕明確に分節化し始めると、成長の度合いはもっと大きくなっていくし、〔体の諸部分が〕完全に分節化した後は、胚子を管理している自然（ピュシス）が〔体の〕多くの部分において同時に活動するために、成長はもっとも顕著なものとなる。

さて、この〔生成の〕最初の時期においては、胚子はまだ心臓を必要としていないのであるが、その境界（ホロス）はどこにあるのか(33)。わたしには〔生成の最初の時期というのは〕肝臓に位置する静脈がすべてにわたって完全に分岐しない間のことであると思われる。わたしが「〔静脈が〕すべてにわたって」という言い方をしたのは、〔生成の最初の時期には、肝臓に位置する静脈は〕すでに二本に分岐しているからである。〔肝臓に位置する静脈が〕そのようであるということは、わたしの目に最初にそのように見えたということではなく、解剖を専門としているすべての人々の間で意見が一致しているところである(34)。すなわち、「臍の緒」からの静脈は、胚子〔の体の〕表面の皮膚の内側の場所によりやく達すると同時に、〔そこで〕ただちに分岐するというわけである。このことは、多くの樹木の場合に幹が二本の大きな部分に分かれて

いくのが見られるのと同じことであって、つづいて、これらの〔二本の〕静脈のおのおのが木の枝のような仕方で分岐することによって、〔そこから〕別の静脈が〔生まれて〕、今度はそれらの静脈〔のおのおのが分岐することによって、そこから〕別の静脈〔が生まれて〕、さらに、そのようにして生まれたもの〔のおのおのが分岐することによって、そこから〕またほかのものが〔生まれていき〕、最終的に何らかの先端にまで達して終わるというというわけである。肝臓に

668 固有の実体は、先に詳細にわたって説明したように(35)、このように〔二系統に〕分岐している静脈群をぐるりと囲い込むとともに、詰め物か何かのように〔これらの静脈の枝の〕間の空間を埋めている。そして、このようにして、〔肝臓の〕下のほうに位置する静脈(36)から分岐したものは、胃の右側の部分を包んでいる、この臓器の〔下側の〕窪んだ部分に生えているのに対して、〔肝臓の〕上のほうの静脈(37)から分岐したものは、横隔膜(ディアブラグマ)に接触している、〔この臓器の上側の〕凸状に盛り上がった部分に生えている。そして、肝臓の二つの門(38)が胎児に生じたのは、以上の原因根拠(39)によるものである。すなわち、〔胎児の〕全身にわたっている静脈はすべて〔胎児の〕「臍の緒」を通して走っている大静脈の部分であるとともに、そこから枝分かれしたものであって、〔肝臓の〕上側の門が生じたのは、肝臓に位置する静脈が生成することを目的としたものであるのに対して、〔肝臓の〕下側の門が生じたのは、胃、脾臓、大網、および腸全体へと向かう静脈が生成することを目的としているというわけである。

肝臓が完成に至ると、その〔上側の〕凸状に盛り上がった部分に生えている複数の静脈が〔一本に〕集められて——〔植物の場合に〕複数の根〔が一本に集められて〕、それらの根から幹が生成するように——、それらの静脈から〔動物の〕体中の静脈のうちで最大のもの(40)が生成してくる。人々がそれを「空の静脈」という名称で呼んでいる(41)のは、そのためである。つまり、〔この静脈は〕ほかの静脈に比べると、まさに目立った存在であるので、人々はこの静脈が大きいということを示すために〔そのような名称で呼んでいる〕というわけである。

669 これに対して、ヒポクラテスは、それが肝臓から生え出していることを観察していたので、肝臓に因んで、この静脈のことを「肝静脈」と呼んだのである(42)。現に、この静脈は動物の全身に沿って長く伸びていて、一方は背骨の真ん中の部分に固定されて、下に向かって走っている(43)のに対して、もう一方は胸郭の真ん中を通して、頸部に向かって上昇して行って(44)、かなり大きな最初の支脈を横隔膜に向かって分岐させていき、さらにそれらの支脈に接続するきわめて細い別の支脈を、胸郭を隔てている被膜(45)と心臓を包む膜(46)に向かって分岐させていき、それらから続く〔別の支脈を〕心臓の右心室と胸郭に向かって分岐させていくというわけである。

これと時期を同じくして、〔肝臓の〕下側の門から発している静脈(47)が胃の辺りのすべての部分へ分岐することによって、それらの部分が生成するための原因根拠となっていくというもの、理に適ったことである。肝静脈(48)の一部が心臓に向かって上に伸びていくその時期

に、下に向かって伸びていく〔静脈の〕部分は、腎臓——なぜなら、腎臓は肝臓の近くに位置する最初の器官であるから——に向かって支脈を分岐させていくとともに、腰部に対応する背骨周辺の場所へ〔別の支脈を〕(49)分岐させていく。それはちょうど、背骨と胸郭のうちの横隔膜よりも上に位置する部分(50)が〔心臓に向かって〕上に伸びている肝静脈から分岐した

**670** 静脈を獲得することによって、それらから生成のための素材(51)を得るのが理に適っているというのと同様である。心臓が形成されていく(52)のもこの時期においてである。というのも、先に述べた一組の動脈が一本に結合して(53)、それがようやく心臓にまで近づいていくのが可能になる〔のも、この時期においてである〕から。現に、〔一本に結合した〕この動脈それ自体も、最終的に心臓の近くに達しそうになるまで、背骨の真ん中の部分に固定されて走っているのが見える。この動脈から、心臓は静脈を流れている血液よりもはるかに熱い血液を引き寄せるので、動脈血が静脈血よりも熱い(54)のと同じ程度において、心臓それ自体も肝臓よりも熱いものに生成するというには説得力がある。心臓には二つの心室が存在している(55)が、このうち右側の心室には適度に熱い状態にある、肝臓からの血液が流れ込んでくるのに対して、左側の心室には、これよりもはるかに熱い、動脈を通しての血液が〔流れ込んでくる〕というわけである。心臓がこれらの〔二つの〕心室と〔静脈血と動脈血という〕素材を両方とも獲得して、その実体がようやくそれらで満たされるようになると、心臓はそれ自体が脈打つとともに、それ自体〔が脈打つ〕と同時に、それ自体と同一の運動(キネーシス)によって動脈を動かす(56)のであって、その結果、胚子はもはや植物として管理されるだけでなく、すでに動物としても管理されるようになるのである。これに対して、ザルガイ(57)をはじめ、ホラガイ(58)やタイラギ(59)やカキ(60)やカサガイ(61)がいかなる種類の動物であるにしても(62)、〔それらは〕脈拍の運動をほんのわずかしかな必要としていないか、

**671** あるいは全く必要としていない。すなわち、脈拍は体が熱い動物に〔のみ〕存在していることがすでに論証されているのであって、無血の動物はいかなるものであっても〔体が〕熱くないことは確実であるし、確実に〔体の〕熱い動物はいかなるものであっても無血ではないというわけである。

たしかに、心臓に由来する熱(63)は別にしても、静脈を流れている血液や——それが原因となって——肝臓には、微温の熱が〔それらに〕生来の熱として存在している。しかし、動物が持っている心臓というのは、いわば火〔を煽るため〕の炉のような存在である。というのも、心臓は別にしても、有血動物の体温というのは、夏の季節における家屋の熱に近いものだからである。けれども、炉に火を焚きつけた後に屋内が暖かくなっていくように、動物の体もそれと同じように、静脈と肝臓、そして明らかに静脈を流れている血液に生来備わっている熱よりも多くの熱を心臓から獲得するというわけである。というのも、エラストラトスは、この体液(64)は動脈中にはまったく含まれていないと考えている(65)のに対して、わたしたちは、現にそう見えるように、動脈中には〔静脈中の血液〕よりきめ細かく、より熱い血液が含まれ

ていると考えるからである。〔体が〕傷を負ったときに、そこから流れ出すものも、何かそのような性質のものである。プラトンもまた、『ティマイオス』篇において、つぎのように語っている(66)とき、以上のことを指摘しているようにわたしには思われる。

672 「これに対して、心臓に関しては、脈管の結節部として、また〔体の〕四肢全体にわたって激しくめぐる血液の源泉として、神々はそれを番兵のための住居へと配置したのである」

プラトンは、心臓が「血液の源泉」であると端的に述べているわけではなく「〔体の〕四肢全体にわたって激しくめぐる血液」の「源泉である」と述べている。「静脈」という固有の名称で呼ばれているものの中を流れている血液には、そのような性質は存在しない。要するに、古い時代の人々は、これらの脈管のうちのいずれの種類にも「静脈」(プレプス)という共通の名称を与えたというわけである。

心臓は肝臓よりも後になって生成するというのが理に適っていたということ、そして、そのことを根拠として、肝臓のほうが〔心臓よりも〕子を孕んでいる〔動物の〕子宮に近い場所に配置されたというのと同じように、脳が整えられていくのも〔心臓よりも〕後になってである(67)から、脳が心臓よりも〔子宮から〕さらに離れた場所に配置されるというのは相応しいことであったということになる。事実、胚子の段階において動物は脳をいささかも必要としない。胚子には見ることも聞くことも必要ではないし、味を感じることも臭いを感じることも必要ではないし、同じように、手足を用いて活動することも〔必要ではないし〕、さらに選択的的判断にもとづく何かほかの活動全般〔を行う力〕も、触覚という感覚(アイステーシス)も表象(パンタシアー)も、推論(ロギスモス)も、記憶力(ムネーメー)も持っている必要がないためである(68)。そのようなわけで、脳および顔面に位置する〔体の〕すべての部分は、もっと後になってから、〔生成の〕時間的順序としては、第三の段階において形成されていった

673 ということである。すなわち、〔この時期を〕適切な時期(カイロス)として、手足もすでに分節化しているし、さらに何か〔ほかの部分についても〕先に述べていたとしたら〔その部分も含めて〕、あらゆる部分が〔胚子の体の一部として〕整えられることにおいて、その完成段階に達するというわけである。

以下の点についても、はっきりしている。すなわち、頭蓋骨は〔体中の〕ほかのすべての骨よりも後になって固まってくるし、そのために、頭蓋骨は〔頭の〕前頂部(69)において非常に薄くて弱いため、新生児の場合には、わたしたちが〔そこに〕触れたときはもちろん、目を向けただけでも、脳の動き(キーネーシス)(70)が見てとれるほどである。そして、このようにして、〔母体が子を〕最初に妊娠してから、〔子の体の形成は〕ようやく第四の時期に至ったことになる(71)。この時期は、妊娠期間において、後になってから形成された〔体の〕諸々の部分力が付けていく段階である。そして、乳児(プレボス)が用いる活動のうちでもっとも力強いのは「栄養摂取のための魂」の活動であって、二番目に力強いのは心臓に由来する活動であるのに対して、脳に由来する活動はもっとも弱いのは、そのためである。現に、〔この時期に

は] 乳児は両足を用いて走ったり、歩いたりすることはおろか、立つことすらできないし、まして、有益な事柄に属する何かを推論したり、学習したり、感覚によってもたらされる何らかの印象（パテーマ）や理（ロゴス）にもとづいて学習したことを記憶したりすることも不可能である。乳児の場合、頭蓋骨が固くなっていったり、歯が生えてきたり、頭蓋に髪の毛が生えてきたりするの**674**は後になってからであるから、その結果、生まれてきた子が体の面においても、魂の〔三部分の〕うちでもっとも優れている「理知的部分」の面においても不完全であるということは、確実に明らかなことである。というのも、魂に帰属する諸々の能力が活動するのは、〔それらに固有の〕器官が完成するのと一緒にであるからである（72）。以上の点については、わたしの著した〔つぎの〕書物（73）を読む意欲のある人であれば、それを学ぶことができる。その書物の中で、わたしは、魂に帰属する諸々の能力が体の混和状態（74）に付帯するということを論証しているからである。

#### 第四章

そこで、一体どうして、クリュシッポス（1）やほかの多数のストア派とペリパトス派（2）の哲学者たちには、心臓について〔つぎのように〕意見を表明することが正しいと思われたのだろうか。すなわち、(ア)〔心臓は〕動物の〔体の〕諸々の部分のうちで最初に生じるものであって、(イ)〔体の〕ほかの部分は心臓によって生成するということ、また、(ウ) 静脈も神経（3）も、その起始（アルケー）にあたるものは、最初に形成されたもの（4）に属するのが必然的であるというのである（5）。〔もちろん、かれらの意見は間違っている。〕というのも、心臓が最初に生成するのではないということは確実に明らかなことであるし、また先の論述において示した（6）ことであるが、すべての専門技術（テクネー）において、製作されるもののうちの最初の部分とそれにつづくすべての部分を〔それが〕完成に至るまで作るのは、同じ専門技術者であるし、さらに、動脈と静脈が精液（スペルマ）の実体〔を素材として、それ〕から、〔体の〕すべての部分のうちで最初に生成したというのは必然的である（7）というわけである。この〔第二の〕点については、『精液について』と題する論考の中でもすでに論証した通りである（8）。

したがって、誰かほかの人が、心臓について〔以上のように〕意見を表明した者たちと同じ**675** ようにして、動物のすべての活動の原理にあたるものは「胎膜」であるとか、あるいは肝臓であるなどと主張したとしても、わたしたちは〔その主張に〕説得されることはないだろう（9）。なぜなら、生成した体のおのおのにとって、生成の始原（アルケー）にあたるものと〔体の〕管理のための〔原理にあたる〕ものとは〔それぞれ〕別であるという点を理解しているからである。たとえば、都市（ポリス）を建設する者と〔都市の〕管理運営にあたる者とは別であるし、それと同じように、船であっても、ほかのどのようなものであっても、〔それを〕製作する者と製作されたものを適正な仕方で使用する者とは別であるというわけである。さらにまた、理知（ロゴスモス）というのは、わたしたちの人生（ビオス）を管理している諸々の能力の中

で、そのすべてのものよりも最後に生成した後、完成の域に達するにもかかわらず、それ自体が原理であって、人間に関わる事柄を管理するのであって、すなわち、魂全体が自然（ピュシス）に適った状態にある場合には〔人々を〕幸福に導くという仕方〔で管理するの〕に対して、それが自然（ピュシス）に反する方向へと逸れた場合には〔人々を〕不幸に導くという仕方〔で管理する〕というわけである（10）。ところで、わたしにとって目下の課題は、諸々の行為（11）に関わる〔人間の〕活動（エネルゲイア）について考察することではない。というのも、わたしがこの論考の中で企てているのは、胚子の形成について語ることであって、この論題は、まさにそれ自体としては、哲学者たちにとってだけでなく、医学者たちにとっても有益なものであるけれども、その一方で、論証（アポデイクシス）のための前提にあたるものを、そうすべきでないところから得るといふ人々（12）がいるために、わたしたちが探究の対象とするのを余儀なくされたものだからである。事実、ある人々は、探究の対象そのものに固有の自然本性

676（ピュシス）を出発点として論証を始めるのを怠って、不明なもの（13）を出発点とする論証を行おうとするからである。これに対して、体の半身あるいはほとんど全身が突然、麻痺状態に陥った（14）ために、選択的判断にもとづく活動（エネルゲイア）のための運動不能になったり、それに加えて完全に感覚が喪失したり、あるいはほんのわずかし感覚のない状態になったりした場合、医学者たちにとって、体のどの部位に対して援助を与えるべきであるかを認識していることは十分に有益である。しかし、以上のことを理解することは、つぎの点があらかじめ探究されるより以前には不可能である。すなわち、動物の〔体の〕すべての部分が感覚（アイステーシス）や先述の運動（キーネーシス）（15）をそれら自体〔の働き〕によって持つことになるのは、解剖を専門としている人々の間ですでに同意されているように、（ア）何らかの力（デュナミス）が脳から神経を通して、それらの部分に流れていくことによるのか、あるいは、ある人々が主張している（16）ように、（イ）〔以上の力が〕心臓から〔神経を通して、それらの部分に流れていくこと〕によるのかという点である。

ストア派の哲学者たちは——わたしにはわからないが、何らかの仕方——目的（テロス）にあたるもの——幸福（エウダイモニア）——というものは、この目的を獲得することによって実現するとかれらは主張している（17）——の発見にとって無益なもの（18）を追求することを試みただけでなく、解剖にもとづいて明らかにされた事柄から離れてまでも〔目的の発見にとっては無益なものを追求しようと試みた〕のである。もっとも、これらの〔解剖にもとづいて明らかにされた〕事柄から〔出発したなら〕、それを発見することも可能であったはずである。しかし、本当のところ、ほかの多くの領域においてそうであったのと同じように、この領域においても、かれらは自分自身にとって無益な事柄の考察に至ったのであるから、解剖を専門と

677 している医学者たちと同じように、一目瞭然な仕方であらうと明らかにされた事柄を出発点として論証（アポデイクシス）を立てるべきであった。その一方で、これらの人々は、（ア）最初に形成されていったのは心臓であると意見を表明した後、かれらが自らの発見のための出発点とした〔は

ずの] 解剖にもとづいて明らかにされた事柄を語ることもできないし、何かほかの理に適った論証を示すこともできないのであって、(イ)[体の]ほかのすべての部分が生成してきたのは心臓によってであるから、(ウ)心臓がそれらの生成のための指導者(19)であるのと同じように、それらの管理にあたる[指導者でもある]と主張することによって、無知(アグノイア)にまた別の無知を重ね合わせているというわけである。

以前、解剖の研究が、現在の時点で[それが]進んできている知識の水準にまでまだ進んでいなかった時代には、神経を通して、動物の[体の]諸々の部分に感覚(アイステーシス)と運動(キーネーシス)を伝える始原(アルケー)にあたるもの[は何かという点]について、いささか途方にくれるというのは、たしかに無理からぬことであった。しかし、この[始原にあたるものは何かという]点については、長年にわたって、解剖を専門としている人々の間ですでに同意されていることであり、また[脳に起因するとされる]諸々の疾患(20)の治療法(イーアーシス)についても、長い時間をかけて試験(ペイラ)を実施し、そこから総合的な知見を得ることを通して、医学者たちによって確立されているというわけである。だから、熱をとまわずに狂乱に陥ったり(21)憂鬱症を患ったり(22)、または何らかの仕方で理性的判断(ロギスモス)や記憶力(ムネーメー)が害われてしまったり(23)、または熱をとまなうて譫妄性疾患を患ったり(24)嗜眠症に陥ったり(25)、または癲癇(てんかん)の症状をきたしたり(26)、卒中を起したり(27)した人々への対応において頭部への処置から遠ざかる者は

678 もはや一人もいないのに、これらの人々は、[それらを]発見したいと願っていたすべての人々によって、すでに確実に認識されている事柄を、自分たちだけでなおも追求しようとしているのである。

しかし、以上の事柄については、当面のところ、この位で十分である。というのも、わたしは、すでに別の個所で[つぎに述べるようなことを]論証してきたからである(28)。すなわち、目的(テロス)の[実現の]ためというのであれば無益であるような、いかなる問題をめぐって、哲学者たちのうちのある人々が長々とした探究に身を投じてきたのかということ、しかも、[これらの人々は]哲学(ピロソピアー)にせよ、幸福(エウダイモニア)にせよ、[それらは]理論的なものであると主張しなければならないと想定している人々と同じように、それらの問題を探究するための説得的な理由(プロパシス)を見出すことすらできないのかということである。

## 第五章

先に述べてきたことに必然的に付け加えるべき点として、解剖にもとづいて明らかにされた事柄と同じように、高貴なる哲学者諸氏の間ではほかならぬ認識されていないことについて、わたしは、この時期(カイロス)を捉えて、ヘロピロス(1)が著書の中で書いていることを出発点(アルケー)に置いた上で語ることにしよう。というのも、ヘロピロスが考えるところ

では、〔人体とその諸器官に関する〕解剖学上の解説というのは、ある人々が〔事の真実を〕間違えて理解したまま行っているように、「〔体の〕あるこの部分がこの部分から生じてくる」と語ることによって、〔人体の働きに関する〕教説（ドグマ）〔の確立〕のための先見（プロレプシス）を何一つもたらすことはないというのである（2）。すなわち、わたしたちを管理している諸能力（デュナミス）が発見されるのは、〔体の〕諸部分を注視することによるだけでなく、

**679** それ以外のことが明らかにされることによるというわけである。

この論考は、わたしが『ヒポクラテスとプラトンの学説』と題する論考の中でより詳細にわたって説明した、いくつかの確定すべき事柄（3）を必要としている（4）のであるが、今ここでも、それらを要点において〔のみ〕説明する必要がある。さて、第一に確定すべき事項というのは、動脈および静脈や神経を切断したり、結紮用の糸で遮断したりすることから導き出される（5）。そこでは、この結紮用の糸の輪の一方の側に連なる部分は、それに固有の活動（エネルギー）をしているのが見てとれるのに対して、もう一方の側に連なる部分は、その活動を完全に喪失してしまう〔のが見てとれる〕というわけである。これと同じことは、脊髄においても一目瞭然な仕方で現れるのを見ることができる。すなわち、背骨のどこかの場所で脊髄が分断されると、切断された所から上のほうの場所に脊髄から生え出ている神経は、運動（キーネーシス）も感覚（アイステーシス）も保持しているのが明らかであるのに対して、〔切断された所から〕下のほうの場所に〔脊髄から生え出している〕もののほうは、すべてがたちまち〔それらを〕喪失してしまう〔のが明らかである〕というわけである。そこで、以上の点から、つぎのことがはっきりしてくる。すなわち、これらの〔運動および感覚という〕能力は、脳に発して〔体の〕上のほうから脊髄へと流れてくるということである。同じ理（ロゴス）にもとづいて、〔体の〕どこかの動脈を糸で結紮すると、糸の上のほうで心臓に繋がっている部分は、以前と同じように脈を打っているのが明らかであるのに対して、そのほかの部分からはただちに脈が失われてしまうという場合、この点においても、つぎのことがはっきりしてくる。すなわち、この〔脈拍という〕運動（キーネーシス）は心臓に起始を持っていて、そこから動脈へ流れてくるということである。さて、以上のことは、活動の始原（アルケー）〔がどこに存在するかということ〕をめぐる判断（クリシス）にあたるものとしては、最も優れているし、最も確実なものである。

以上の判断に続いて、検討の対象とされている〔体の諸部分〕本体の本質的あり方がすべての点で同じであるか、あるいは完全に異なっているかという点が〔第二に確定すべき事項で〕ある。すなわち、脊髄と神経については、その本質的あり方がすべての点にわたって脳のそれと同一であって（6）、それと同じように、それらを包み込んでいる保護物の本質的あり方も脳を包み込んでいる膜（7）のそれと同一である（8）。これに対して、動脈の本質的あり方は心臓の本質的あり方とはいかなる点においても近い状態にないし、それと同じように、静脈の本質的あり方は肝臓のそれと〔いかなる点においても近い状態に〕ないというわけである。そこ

で、〔体の部分の本体相互の〕本質的あり方が同一である場合には、つぎのことがはっきりしてくる。すなわち、木の枝が主幹を離れて〔生成することが不可能であるというの〕と同じように、より薄いものはより厚いものを離れては生成することが不可能であるために、それらからの分岐物（アポブラステーマ）として存在しているということである。これに対して、静脈の本質的あり方が心臓および肝臓のそれと別であるということが確実に明らかであるという場合、つぎのことは、明らかにされた事柄に依拠するかぎりにおいて、はっきりとしない。すなわち、(ア)「空の静脈」(9)は心臓から生え出してから、肝臓の内部に向かって生えているのか、それとも(イ)肝臓に起始(アルケー)を持っていて、〔そこから〕心臓に向かって生えているのか、あるいは(ウ)そのいずれでもなくて、〔体の〕どこか第三番目の部分がこの静脈の起始にあたるものであるかのいずれかであるというわけである(10)。したがって、肝静脈(11)に関して

**681** は、解剖を専門としている人々によって、その生成の始原にあたるものが探究されてきたのに対して、神経に関しては〔脳が生成の始原にあたるのが、かれらの間では〕すでに同意されているというのは当然のことである。もっとも、肝臓が「空の静脈」にとって生成の始原であるということが発見されたとしても、そうであるからといって、つぎのことは、その点に依拠するかぎりにおいて、はっきりとはしていない。すなわち、肝臓が生成したのはより先であったように、それと同じようにして、肝臓は完成された動物において管理のための始原(アルケー)として存在しているか、あるいは、それらの動物にとって始原にあたるものは〔体の〕どこかほかの部分から発しているのかということである(12)。

さらに、つぎのことについても確定する必要がある。すなわち、脈管のうちで大きいものが小さいものの始原であるのか、あるいは小さいものが大きいものの始原であるのかということである。なぜなら、この点においても、医学者たちのうちのある人々はある誤りを犯してきたわけであって、それはちょうど、胃や腸に向かって下りていく静脈の先端(13)が〔それらの〕始原であると主張する人〔が誤りを犯してきたの〕と同様である。なぜなら、それらの〔静脈の〕先端の生成については、「胎膜」から肝臓に向かって伸びている静脈(14)が、それ自体から分岐して生じたものを〔それらの静脈の〕先端に向かって分かれていくように伝達していくことなしには考えられないからである。以上明らかにされたことをもとに、つぎのように推論するのは、理に適ったことである。すなわち、子宮内に存在する静脈の始原は、樹木の場合では根の先端に似ているのに対して、「臍の緒」を通して肝臓に達している静脈は主幹のようなもの〔に似ている〕ということ、そして、以上のとおりであることから、動物〔の体内〕の静脈の

**682** 先端として見えるものは〔植物の〕根ではなくて、枝〔に似ている〕ということである。

わたしは、あるとき、以下の論題についても考察を進めることを試みたことがある。すなわち、(ア)胎児においても完成した動物においてももっとも大きいことが明らかである、それらの二つの脈管——わたしが言っているのは、大動脈と臍と肝臓の間に位置する静脈(15)のことである——の外膜(16)が、精液(スベルマ)〔を素材として、それ〕から(17)〔体の〕すべて

の部分のうちで最初のものとして生み出されるということ、そして（イ）それらが分岐することによって「胎膜」の動脈と静脈が生み出されるということ、さらに（ウ）それらの先端は樹木の場合の根の先端に似ているということを主張することが可能であるためには、どのような方法によるのがよいかということである。しかし、以上の説明に従うとしたら、肝臓も心臓も最初に生成するものでないということは明らかである。というのも、〔その場合〕それらが生成するための血液状の実体を必要とすることは明白であって、それは子宮から脈管を經由して〔そこに〕届かなければならないからである。その一方で、すでに先の論述において述べたことであるが(18)、精液(スperlマ)が製作者(デーミウールゴス)の理を持つことになる(19)のに対して、脈管については、これらの臓器が生成するための血液がそれらを經由して、子を孕んでいる母体から引き寄せられるのであるから、〔体の〕すべての部分のうちで最初に生み出されることになるし、それらに続いて、二番目には、肝臓と心臓が「さながら家の土台や船の竜骨のごとく」(20)〔生み出されることになる〕。ところで、精液(スperlマ)中に含まれる力

**683** (デュナミス)がこれらの臓器を形成していく時期に、これらの臓器に隣接していたり、またそれらの脈管と子宮との間に位置していたりする、そのほかの〔体の〕部分も形成されていくとするのが、たしかに理に適っている。なぜなら、植物や動物に関して〔それらを〕形成する力(デュナミス)は、当然ながら一瞬たりとも停止するということはないし、その力は全体として〔体の〕すべての部分に対して同時に何かを追加的に産出していくとともに〔そのような仕方、それらの部分を〕増大させることになるからである。したがって、動物を形成していく自然(ピュシス)(21)は、〔これらの臓器が形成されている間も、体の〕ほかの部分の製作行為(デーミウールギアー)から離れることはないばかりか、むしろ、静脈を動脈と同じように分岐させることによって〔それらを体中に〕導いていくとともに、〔それらの脈管を〕囲い込んで肝臓と心臓を産出すると先に述べたように(22)、それらの脈管を囲い込んでほかの臓器を産出することになるし、同時に〔その臓器に〕似つかわしい形態(スケーマ)と位置(テシス)や、そのようなもので、ほかにも〔体の〕諸々の部分にとって持っているのが相応しいもの〔があるならば、それら〕(23)を適切な仕方で作出すというわけである。

そのようなわけで、ある人々(24)は、最初に形成された部分によって〔体の〕ほかの部分が生み出されるなどと性急に意見を表明しているために、あらゆる点において論駁されている。というのも、〔動物の体を〕形成する原因(アイティオン)にあたるものが、その部分を完成させた後、自分が作ったもの(25)に対して〔体の〕ほかの部分を生み出すように命じた上で、〔それ自体は〕胚子から立ち去っていくということがないのは確実であるから。事実、この説明に従うとしたら、動脈と静脈は〔動物の体のうちで〕最初のものとして生成した後、〔体の〕ほかの部分を生み出すことになるというわけである。しかし、動脈および静脈の本体が肝臓または

**684** 心臓の実体から分かれて生じたものではないということは、まったくのところ明らかであって、脊髄と神経が脳〔の実体から分かれて生じたものであることが明らかである〕というのとは異

なっている (26)。それゆえ、不明な事柄の中にいることを想定して、つぎのように意見を表明することがもっとも説得的である。すなわち、(ア) 動脈と静脈を生み出したほかならぬそのものがこれらを分岐させながら、胚子の〔体の〕すべての部分へ伸ばして行って、これらの脈管を囲い込んで、〔体の〕諸々の部分をそれらに固有の場所に形成したということである。また、〔つぎのように意見を表明することも〕もっとも説得的である。すなわち、(イ) 以上のようにして形成された〔体の〕諸々の部分は、それらが完成にいたると、それら自体の本質的あり方に固有の活動 (エネルギー) を行うことを開始するのであって、しかも〔それ自身に〕特有の活動をなすために、腎臓は〔体の〕どこかほかの部分が必要としていないのであって、膀胱も子宮も脾臓も腸も、また一般に〔体の〕そのほかの自然的器官も〔それ自身に特有の活動をなすために、体のどこかほかの部分が必要としていない〕ということである。もっとも、〔体の〕諸部分からは相当量の〔実体の〕流出 (27) が毎日のように生じるため、それらの部分の実体は、量 (ポソン) という点において〔同一に〕とどまっていることはないし、質 (ポイオン) という点においてもそうである——なぜなら、この〔質という〕点においても〔実体は〕変化していくからである——ので、空にされた部分がまた満たされたり、〔質的に〕変化をこうむった部分が復元されたりするためには、〔部分間において〕相互に援助 (エピクーリアー) を必要としている。だが、この援助にあたるものをめぐって、いくつかの数の、どのようなものが存在するのかという点については、哲学者たちの誰一人として〔それを〕厳密な仕方で発見してこなかったし、解剖〔という方法〕を離れて、それらの探究に至ったような医学者たちの間でも〔誰一人として〕厳密な仕方で発見してこなかった〕というわけである。

685 現に、心臓——なぜなら、ある人々 (28) は、心臓のみが動物を管理することを願っているからである——は、呼吸を奪われると、それ自体が動くのを停止する (29) し、動物全体も心臓と一緒に減ってしまうというわけである。〔心臓が〕呼吸を奪われることになるのは、吊るされて窒息した人々の場合や、あるいは喉頭 (ラリュンクス) 周辺の部分が炎症を起こしたことが原因で、空気を吸い込むための管 (ポロス) (30) が遮られてしまった場合だけでなく、胸郭 (トーラークス) を動かす神経が切断されるか、それが破損するか、あるいは糸で結紮したことによって害われた場合である。すなわち、これらのすべての神経の起始 (アルケー) にあたるものは脊髄であって、脳が脊髄の〔起始〕にあたるというのと同様である (31)。そのようなわけで、脳は、神経を通して胸郭を動かすことによって、心臓の保全に役立っている。すなわち、胸郭が拡張すると息が吸い込まれるのに対して、胸郭が収縮すると息が吐き出されるというわけである。それと同じような仕方で、心臓は脳にとって何らかの有益な働きを提供しているし、肝臓はこれらの両者にとって〔何らかの有益な働きを提供している〕のである。以上のことについては、これらに関する論考の中で、すでに論証したとおりである (32)。

現実には、これらの〔心臓、脳および肝臓という〕三つの始原 (アルケー) (33) がそれぞれの働きによって相互に助け合っているというだけでなく、〔体の〕ほかのすべての部分が〔それ

ぞれの働きによって相互に助け合っている]というわけである。事実、[体の]ある一つの器官を例にあげることによって、かの『人体の諸部分の用途について』と題する論考の中で[体の]諸部分のうちのおのおのに関して説明したことを[読者に]思い出してもらおうとしたら、例え  
686 ば、腎臓も脾臓も(34)二つの「囊」(35)も、肝臓の[保全の]ために生成したのであって、[以上の二つの「囊」のうち]胆汁(コレラ)を受け入れるものは、この[肝臓という]臓器それ自体から下のほうに向かって付加的に生じたものであるのに対して、尿を受け入れるものは腎臓の下のほうに配置されている(36)し、脾臓はこの[肝臓という]臓器から泥状の余剰物(37)を除去するというわけである。胃も肝臓のために栄養をあらかじめ熟成するし、何重にも折れ曲がった腸の構造は[胃が熟成させた栄養を]消化して肝臓へと向けることを目的として生成したのであって、以上のことも、また体の各部位に関するすべての事柄については、『人体の諸部分の用途について』と題する論考の中ですでに示してきたとおりである(38)。だが、心臓にすべてを帰している医学者たちや哲学者たち(39)は、これらの事柄のうちのいずれに関しても、ほんのわずかしら認識していないために、向こうみずくに意見を表明しているというわけである。

しかし、以上の点については、おそらく、現在、課題とされている事柄に関わる範囲をこえて、より詳細にわたって論を展開したことになるだろう。そのわけは、解剖を専門としているすべての医学者たちが、当然のことながら、つぎのことに対して憤りを感じているからである。すなわち、ある人々は、自分たちが理解していない事柄について意見を表明しているばかりか、専門知識を持っている人々を大胆にも非難の対象にしているというわけである。これらの人々は、自然(ピュシス)によって最初に形成された[体の]部分が、それ自体として[体の]ほかの部分形成していく、そしてそれにあたるものは心臓であると考えている(40)が、これら両方の言明に関して、かれらは誤りを犯しているというだけではない。(ア)心臓が[体の]  
687 すべての部分のうちで最初に形成されるというだけでなく、(イ)それが[体の]ほかの部分形成するということが同意されたとしても、これらの点から、(ウ)完成された動物における活動(エネルゲイア)がそれによって生じるということは必然的に帰結しないという点においても[誤りを犯している]のである。というのも、あるものが生成の始原(アルケー)であるということと、管理のための始原であるということとは同じではないからである(41)。

## 第六章

そこで、本論考において最も重要な課題(1)に移行した上で、以上の人々(2)は、医学者たちによって立派に探究されてきた事柄すら、探究するに値すると考えていないばかりか、かれらは「胚子は自然(ピュシス)によって形成される」と主張すれば、すべての人々が慣れ親しんでいる言葉以上のことを語っていると思込んでいるということを示すことにしたい。事実、胚子の生成の原因(アイティアー)にあたるものが何か存在していることを想定しないほど、そこまで愚かな人は一人もいないからである。もっとも、わたしたちは全員、その本質

的あり方を認識しないまま、原因にあたるものを自然（ピュシス）という名称で呼んでいるというわけである。これに対して、わたしは、わたしたちの体が整えられていることが、それを作り上げたものの最高の知恵（ソピアー）と同時に、その力（デュナミス）を表していることを示した（3）のと同じように、哲学者たちがわたしにつきのことを示してくれることを願うものである。すなわち、（ア）〔わたしたちの体を〕形成したものは知恵と力を備えた何らかの神（テオス）であって、それぞれの動物の体がどのようなものに整えられるのが相応しいかを  
**688** あらかじめ想定し、第二に〔それぞれの動物の体の〕能力を、あらかじめ設定した体に見合うように整えたということか、あるいは（イ）神に属する魂（プシューケー）（4）とは何か別の魂がそれにあたるのかという点である。

なぜなら、（A）かれらは、自然（ピュシス）という名称で呼ばれているものの実体——それが非物体的な何かであろうと、物的な何かであろうと——が、知恵（ソピアー）の極みに達していると主張することは決してないからである。事実、かれらは〔自然はそのような知恵を〕全く持っていないと語っているからである。しかし、その一方で、（B）胎児の形成に関して〔自然が〕偶然（テュケー）にもとづいて、あれほどまでに専門技術に適った仕方で活動したということに説得されることもあり得ない（5）。なぜなら、わたしたちは、エピクロス（6）および「万物は〔神の〕摂理（プロノイア）なしに〔偶然によって〕生成した」と信じている人々の話を聴講することによって、以上のことに説得されるということはないからである（7）。そうなる、つぎのことが必然的ということになる。すなわち、（B）胎児の形成というのは、何か非理的で非技術的な運動（キーネーシス）にもとづいて〔進んでいき〕、有益な目的（テロス）に到達することになるのか、あるいは、（A）〔自動で動く〕見世物を整備した人々が、運動の始原（アルケー）をそれらに提供した後、自分たちは〔そこから〕離れてしまうのに対して、〔そのように〕整備されたものが、しばらくの間、専門技術に適った仕方で動き続ける（8）ように、それと同じようにして、神々は、植物の種子と動物の精液を〔生成のすべての段階に合致する〕それだけの数の運動を継続させていくのに適したものへと整えた後、自らはもはや何も行わないということである。

しかし、先行する選択肢（B）については、わたしの論考がもっぱら〔批判の〕対象としている人々（9）によってすでに非難されているので、論破するには及ばない。これに対して、第二の選択肢（A）については、つぎのことをもっと厳密な仕方で考察してみなければならない。

**689** すなわち、生殖液（ゴネー）に固有の性質として見られる、そのような性質の液体が〔動物の体の完成として〕相応しい目的（テロス）に達するまで、何一つ仕損じることがないように、あれほどの数の運動を相互に継続させていくのに充分であるということが可能であるかということである。というのも、あれほどの数の〔体の〕部分〔が形成されていく過程〕において、それが偶然（テュケー）にもとづいてであるとしたら、何一つ仕損じることがないということが信じ難いと同じように、それと同じように、専門技術に適った仕方で継起していく諸々の運動が、

まさしくかれらが主張しているように、何か非理知的な実体によって引き起こされると意見を表明する(10)のは、いかにも向こうみずであるから。

さらに、つぎの点は、もっと驚くべきことである。すなわち、わたしたちの誰もが全生涯を通して目にしているものがどのようにして起こるのかということ、自然に関する学問(11)を教授している人々のうちの誰一人として考えたこともないし、探究の対象としたこともないという点である。すなわち、それは〔体の〕諸々の部分の活動(エネルギー)に関することが、どうなっているかということである。確実であることを期す目的で、典型的な実例(パラダイグマ)を一つないし二つ挙げながら(12)論を進めていくことにしよう。そこで、最初に、手の先端には明らかに五本の指があって〔各指は〕相互に分節化した三つの骨から構成されているということを〔実例として〕挙げることにしよう。わたしが思うには、天空(ウーラノス)と全宇宙(コスモス)について、それらがどのような仕方で整えられているかを発見したいと考える人々は、手の指について、つぎの点に習熟することを優先したほうがよい。すなわち、  
**690** ある時には指が多く関節のところでも同時に伸びたり、関節ごとに順番に伸びたりする場合、ある時には指が曲がったり、あるいは小指または親指のほうに向かって、二通りの仕方で斜めに逸れ曲がったりする場合、その運動が〔体の〕いかなる器官を通して起こるのかという点である。というのも、筋肉(ミューズ)については、解剖を通して〔それを〕露出させる以前には、わたしたちには〔それが〕わからないわけであるが、〔指の〕活動がすべてを通して起こるということをかかれらが理解したならば、わたしたち自身だけでなく、小さな子供までもが、この指を伸ばしたり曲げたりするように促されると、それを動かす筋肉を知らないのに、すぐにそれを行うのはどうしてであるかということに驚くはずであるから。舌に関しては〔第二の実例として〕さらに適切である。舌に関しては、〔それを〕動かしている筋肉の総数について、解剖を専門としている人々の間ですら意見の一致を見ていないからである。〔舌に関しては、〕おのおのの運動を部分ごとに導いていく筋肉を確実に理解することが、かれらにはそれほどまで欠けているというわけである。しかし、以上のことについても、医学者たちのうちでより注意深い人々の間ですでに探究されてきた。それで、〔舌を動かす〕おのおのの筋肉は、まるで何か動物のように、わたしたちの意志(ブレーシス)を観察することによって、明瞭な音声〔を發するの〕に相応しい形態(スケーマ)になるように、舌を引っ張ったり脇のほうに逸らしたりすると主張した人(13)もいたわけである。もっとも、この説明はほかのすべての人々  
**691** にとって説得的であるというわけではない。けれども、つぎのことは、明らかに驚きに値する。すなわち、小さな子が、あるこの物体が「パン」という名称で呼ばれるのを聞いた後で「パン」という音声を發音するとき、舌がどのような形態になるのかについても、またいかなる筋肉によって〔舌が〕部分ごとの動きへと向けられるのかについても知らず、さらにおのおのの音声に相応しいものに舌の形を様々に変化させることによって、一連の言葉を順に語るのだということである。

そこで、わたしたち〔の体〕には三百以上の筋肉があるのだから、それらのおのおのが動物として存在しているというのは説得力を欠いている。したがって、わたしは、以上の(14)説(ドクサ)が説得的でないということを根拠として、その説から離れた後、別の人々によって尊重されていたほかの説へと考えを変更したのである。すなわち、神経が筋肉を〔神経〕それ自体の起始(アルケー)のほうへ引いていくと、関節の接合部を形成している骨のうちで、筋肉の先端がそこに向かって生え込んでいる、下のほうの骨が〔筋肉の動きに〕従って動くことになるというわけである。しかし、この説の場合でも、どの筋肉が引っ張られるはずであるかということをおぼろげにわたしたちは知らないのに加えて、さらに、最も大きい筋肉に向かって生え込んでいる最も小さい神経それ自体の大きさもその反証となる。すなわち、まだ生きている動物の場合でも、筋肉のほうは〔選択的判断にもとづく活動(エネルギー)によって動いているのが見えるのに対して、それらの神経は選択的判断にもとづく活動(エネルギー)によって動いているのが見えないというだけでなく、死んだ動物の場合にも、わたしたちが手でそれらの神経を引っ張ったとしても、かつて〔生きていた動物の場合に〕筋肉が関節の接合部の骨を

692 引いていた〔のが見えていた〕のに対して、〔それによって〕筋肉が引かれるところが見えないというわけである(15)。

さらにまた、筋肉のおのおのは〔わたしたちの〕意志(プーレース)に固有の運動を行うということから、精液(スペルマ)が〔自動で動く〕見世物(16)と同じような仕方で整えられていて、自らが実行することを迫ることが全くないので、それ自体は何も認識しないということも説得力を欠いている(17)。魂(プシューケー)は自分自身を取り囲むように身体を形成したと主張している人々の主張が、何らかの〔感覚に〕明らかな事柄を出発点として説得的な仕方準備されたものであるにもかかわらず、そこから(18)反論(アンティロギア)を招いているのも、そのためである。というのも、この主張を準備しているのは、体の諸々の部分の用途が、誕生すると同時に、すでに動物に備わっているという事実だからである。現に〔動物の〕おのおのが、ほかの動物をそれによって圧倒するような、体の特定の部分によって保護されていることは明らかである。たとえば、若い牛はまだ角が生えてくる前から〔角で〕突くような動作をするし、仔馬は蹄がまだ硬くなっていないうちから〔それで〕蹴ろうとするし、子犬は、まだ強力な歯が生えてこないのに、噛みつこうとするし、動物のうちで飛行するもの(19)は、まだ飛ぶことができないのに、飛ぼうと試みるというわけである。以上のことは、これらの部分を使用する魂(プシューケー)は、ほかのものによって生み出されたものを使用するのではなく、自分自身でそれらを整えてきたかのように、それらの部分の用途を認識しているという事実を表しているように思われる。けれども、わたしたちが〔体の〕ある部分を何らかの運動

693 によって動かそうという意志を働かせると、その部分を動かしている筋肉がわからないのに、その部分がすぐさま動くのはいかなる原因によるのかということ、最大の難問の一つである。事実、解剖を専門としている人々によって、解剖にもとづいて語られてきたのは、せいぜい、

おのおのの筋肉に固有の活動(エネルギー)[が何であるかということ]に過ぎない。

それで、以上のことを根拠として、ある人々(20)は〔体の〕各部分を整えた魂(プシューケー)と〔それを〕選択的判断にもとづく活動(エネルギー)へと駆り立てる魂は別であるという説を立てたというわけである。そこで、以上の説明に従うならば、〔体の〕諸々の部分を形成した魂は〔完成された〕動物の体の中になお存在しているように見える。というのも、各部分を使用するのは、現在〔動物の体の中に〕存在している魂であるのに対して、それを整えた魂のほうは〔体から〕去ってしまっているということはあるからである(21)。そのようなわけで、〔動物の体の〕諸部分を形成した魂に関する論述は、どの点を取り上げても難問として存在するということになる。だが、わたしが思うには、少なくともつぎの一点を示していることだけは確実である。すなわち、わたしたちを整えたものの専門技術(テクネー)については、それを〔囚われのない〕自由な思考(グノーメー)によって考察するならば、非理知的な偶然(テュケー)に帰すことは不可能である(22)という点である。

現に、〔わたしたちの〕体の中には三百をはるかに越える数の筋肉が存在していて、それらによって〔体の〕諸部分は選択的判断にもとづく運動によって動くのであるが、それらのうちの  
694 おのおのは〔それに〕適した形態(スケーマ)、大きさ、先頭と末尾、位置(テシス)、およびその筋肉に適合した大きさと〔そこに向かって〕生え込んでいく場所とを持った神経と静脈と動脈が生え込んでいく部分を有している。それらは、あれほどの数にのぼるにもかかわらず、そこに非難すべきものを何一つ発見することはないはずである。以上のことについては、『人体の諸部分の用途について』と題する論考の中で、すでに論証したとおりである(23)。さらに、三百の筋肉がそれぞれ〔そのような仕方〕で整えられていることには十の目標(スコポス)があるとして、〔それらが〕すべて確立されていることが明らかであるとしたら、全体で三千の目標があるということになるだろう。それでも、このようにして整えられている筋肉に関してもっとも驚くべきことはまだ語られていない。それはすなわち、〔体の〕左側の部分にある筋肉は右側の部分にある筋肉と厳密に等しいということであって、それは〔体の左側の部分にある〕動脈、静脈および神経がそうであると同様である。したがって、三千の目標というのは、二倍になるというわけである。

同じことは、二百以上の数で存在している〔体の〕骨についてもあてはまる。というのも、骨に関して、そのおのおのについて十個の(24)目標が存在するとしたら、〔目標は〕二千をはるかに越えることになり、〔体全体では〕二倍となって、四千をこえることになるのは明白であるから。〔体の〕すべての臓器に関して、さらに一般に〔体の〕どの部分に関して同一の専門技術(テクネー)が関係しているということになると、その結果、〔からだのすべての部分  
695 まで確立されたとして、何千どころか、何万という数に達する。わたしは、すでに語ったように(25)、最高の知恵と最高の力を備えた製作者(デーミウールゴス)なしに、これらの目標が

生成してきたということに説得されることは決してないだろう。そこで、この〔製作者にあたる〕者が誰であるかということ、以前、かの哲学者たちから聴くことを期待したというわけである。事実、かれらは宇宙（コスモス）と万有の（26）生成についても意見を表明している。なぜなら、自分たちの体がどのようにして整えられているかは、かれらによって〔宇宙と万有の生成についてよりも〕はるかに容易に把握されていると、わたしは考えたからである。そこで、わたしは第一人者にあたるある人物に、わたし自身を弟子として委ねた上で、かつて幾何学の分野における論証（アポダイクシス）を聴講したときの方式に則って、そのような仕方、その人物からも聴講することを期待したのである。ところが、かれが図形的論証はおろか、弁論家が用いる信念（ピステイス）も語らない（27）のを知ったので、〔その人から離れて〕別の人物のもとに赴いたのであるが、ほかならぬその人物も〔その人自身に〕固有の前提にもとづいて、以前の人物と矛盾対立することを意見として表明していたというわけである。そこで、第三、第四の人物を試してみたものの、すでに語ったように、誰からも非の打ちどころのない論証を聴いたことはなかった。こうして、以上のことに大いに悩んだ末に、わたしは、ここに至るまで自分自身を頼りに、動物〔の体の諸部分〕を整えているものを根拠として、何らかの有力な論を発見しようと努めてきたというわけである。だが、結局のところ、〔そのような論は〕

696 何一つ発見することはなかった。この論述を通して、わたしがまさしくこのことを認めるのは、哲学者たちのうちで、以上の事柄に関して探究を行ってきた有能な人々に対して、もし何か知恵に値するものを発見したというのであれば、それをわたしたちと惜しみなく共有してくれることを強く求めたいからである。

すなわち、子供が、何であれ、わたしたちが発音するように命じる言葉——たとえば「スミュルナ」「スミーレー」「スメグマ」等（28）——を発音するところを目にする一方で、そのような音声に適した仕方、舌を動かす筋肉〔がどれか〕についても知らないし、ましてそれら〔の筋肉〕それ自体の神経〔が何なのか〕についても知らないという場合、わたしが考えるに、もっとも説得力があるのは、つぎのような説明である。すなわち、舌を形成した者——それが一体何であろうと——が、それ自体として、形成された〔体の〕諸部分の中になお存在しているか、あるいは、それらの部分が〔それぞれ一個の〕動物にあたるものとして、わたしたちの魂（プシューケー）の指導的部分（29）の意志（ブーレーマ）を理解するように〔それらの部分を〕整えてきたかのいずれかであるということである。しかし、以上のことの帰結として、わたしたちを指導するものに対応している魂（プシューケー）（30）は〔体の〕おのおのの部分の中に存在している魂、あるいは〔体の〕すべての部分を全体にわたって管理している、唯一共通の魂とは別であるということが発見するので、わたしは途方にくれた状態（アポリアー）に陥っているというわけである。わたしたちを形成した専門技術者（テクニテース）〔が何かという点〕に関して、確実な認識はおろか、可能性のある思想の域においてすら、何も発見すること

697 ができていないからである。というのも、ある哲学者たちが、永遠に魂を持って存在する素材

(ヒューレー) が形相 (イデア) のほうに目を向けて自分自身を秩序づけると主張する (31) のを聴いた場合でも、それでもなお、わたしは、わたしたちを形成した魂と現在〔わたしたちの体の〕おのおのの部分を使用している魂は一つであるはずであるという考えを抱いているのだから。ところが、わたしたちを管理している魂が、それ自身の情動 (ホルメー) に奉仕している〔体の〕諸部分について無知であるという事実は、以上の考え方と対立する (32)。

たしかに、要素的な音声 (33)〔の発音〕をめぐって何らかの意見を述べようと試みてきた人々は、つぎのような意見を表明するところまで進んでいる。すなわち、あるこの音声が発せられるのは、舌が「切歯」という名称で呼ばれているもの——上顎に並んでいるもの、または下顎に並んでいるもの——に向かって押しつけられることによってであるのに対して、あるこの音声〔が発せられるの〕は、舌が「口蓋」(ウーラニコス) あるいはほかの部分に向かって押しつけられることによってであって、同じようにして、喉頭 (ラリュンクス) から上に運ばれてきた氣息 (プネウマ) がある時には鼻腔に達することによるか、ある時には大きく開いた口から時には一度に多量のものが吐き出されるのに対して、時には少量のものが徐々に吐き出されることによるというのである。だが、以上の運動をなしている筋肉〔がどれにあたるかという点〕については、かれらのうちの誰一人として〔何も〕述べていない。事実、〔それに該当する筋肉は〕解剖の経験を最大限に積んできた人々によってすら、確実な仕方では発見されていないというわけである。

698 しかし、以上の事柄について何一つ発見したこともないし、探究したことすら全くない人々は、ただ一つの意見を性急に表明しているのではなく〔複数の意見を〕一連の主張へとつなぎ合わせているというわけである。すなわち、第一の仮設 (ヒュポテシス) を——それが感覚によっては未確認である一方、理 (ロゴス) によっては未発見であるにもかかわらず——直ちに立てることによって、(ア)〔体の〕すべての部分のうちで最初に生成するのは心臓である」と主張し、これに続いて第二の仮設として、(イ)〔体の〕そのほかの部分には心臓が形成する」と主張して、その結果、心臓を形成したもの——それが一体何であるかはともかく——がすでに減んでしまっ、もはや存在していないとでもいうように〔考えているの〕であって、さらに続いて、そこからの帰結として (ウ)「わたしたちのことを思量する魂の部分 (34) もこの器官の中に座を占めている」という説明を加えているというわけである (35)。もし思量する部分がそうであるとしたら、かれらが語るところでは、飲食や性行為や金銭を欲求する部分もそうであるし、さらに気概を持ち、争いを好む部分もそうであることは明らかである (36)。しかし、以上のことはいずれも必然的ではないばかりか、〔問題への〕最初の取り組みにおいて、ある人々には「あり得る」と思われたとしても、それ以降は〔感覚にもとづいて〕明らかにされる多くの事柄を通して反駁されているのである。

〔動物の体のうちで〕最初に形成されるのは、わたしたちが理 (ロゴス) に依拠し、解剖にもとづいて明らかにされた事柄をもとに考察した場合、動脈と静脈、および「胎膜」と肝臓で

あって、心臓ではないという判断に至る(37)のであって、これに続く〔体の形成の〕第二の段階および第三の段階については、先に述べた通りであって(38)、〔動物の〕誕生後に、ある部分699ある部分は〔それまでに〕全く存在していなかったものが付け加わる一方、ある部分は不足した状態であったものが完成するということを、わたしたちは提示したわけである。

人がもっとも驚きを隠せないのは、生まれてくる子供が生みの親たちに似ているということが、どのようにして起こるのかという問題である(39)。というのも、この場合も〔わたしたちの〕体を形成する魂(プシューケー)が、精液(スペルマ)中に包み込まれるようにして、親たちから胚子へと達したように見えるからである。さて、この魂の本質的あり方が何であるかという点についてであるが、わたしにはそれを説明することができない。それはつぎのような理由によるものである。すなわち、わたしが聴講したある人々は、かれらが語るには、この魂は非物体的存在であって、精液(スペルマ)と一緒に〔母体に〕入ってきて、孕まれることになるものを形成するために、それを〔胚子に〕ふさわしい素材(ヒューレー)として用いるのであると確信している(40)。一方、かれらのうちのある人々は、精液(スペルマ)は素材ではなく、魂の道具(オルガノン)として存在しており、素材にあたるものは母親の血液であると主張していて(41)、これに対して、別の人々は反対意見を述べている。すなわち、ある人々は、精液(スペルマ)は専門技術者(テクニテース)そのものである(42)という説に立っていて、そのうちのある人々は〔精液の〕全体がそうであるというのに対して、ある人々は精液中に包み込まれている氣息(プネウマ)がそうであるという説に立っているというわけである(43)。それで、わたしは、以上の事柄に関して〔それらを〕別個に〔取り上げることによって〕著書700中で記したわけである。そこでは、クリュシッポスが『魂について』と題するかれの著作の中で論じている事柄について考察している(44)し、またそれに加えて、別の著書では、プラトンが、魂(プシューケー)に関する論考の中で、自分自身と異なる意見を述べているように思われるのはどの点においてであるかということについて考察している(45)。しかし、わたしが述べているように、学問的な仕方で論証されてきた説については、何一つ発見することがなかったので、魂(プシューケー)の本質的あり方〔が何であるかという点〕については、信頼の置ける域にすら進むことができずに、途方にくれていることを認めざるを得ない。

そのようなわけで、胎児を形成した原因(アイティオン)をめぐっては途方にくれているということを、わたしは認めざるを得ない。すなわち、〔胎児の形成には〕究極の知恵(ソピアー)と同時に究極の力〔が働いているの〕をわたしは見ているので、精液(スペルマ)の中の魂(プシューケー)——アリストテレスとその支持者たちには「植物的魂」(46)と呼ばれているのに対して、プラトンには「欲望的魂」(47)と呼ばれており、ストア派の人々には「魂」ではなく「自然」(ピュシス)(48)と呼ばれているもの——が胎児を形成するものであるとは考えない。それは、この魂が知恵を欠いているだけでなく、完全に非理知的であるからである。その一方で、生まれてくる子供が産みの親たちに似ていることを根拠とした場合、この魂を〔胎児形成

の原因にあたるものとして]完全に排除することもできないでいる。さらに、[人が]誕生した後、全生涯にわたって働く「理知的魂」[を胎児形成の原因とみなすこと]については、わたしたちは解剖に先立って、体の諸部分についても、それらの活動についても認識を持ちえないという理由で、この魂を[胎児形成の原因としては]排除するものである。

プラトンの学派の教師たちのうちの一人がわたしに語ったところでは、胚子を形成するのは  
**701** 全宇宙に浸透している魂(49)であるという。[胚子を形成する原因にあたるものが持つはずの]専門技術(テクネー)と能力(デュナミス)は、たしかにかの魂に相応しいとわたしは考えたものの、その一方で(50)、サソリ、ドクグモ(51)、ハエ、コーノープス(52)、クサリヘビ(53)、蛆(54)、ヘルミンス(55)やアスカリス(56)[等の下等動物ですら]かの魂によって形成されると考えることは、わたしには耐えがたかった。そのような意見は不敬であることに近いと考えたからである。だが、素材の魂(57)が専門技術(テクネー)のこれほど高い水準に達するというのは理に適っていないとわたしには思われる。

動物を形成する原因(アイティアー)をめぐって、つぎの点に関してだけは意見を表明することがわたしには可能であると考え。すなわち、その専門技術(テクネー)と知恵(ソピアー)はもっとも偉大なものとして存在しているのであって、それはちょうど、体が全体にわたって形成された後にも、それが運動(キーネーシス)の三つの始原(アルケー)によって全生涯にわたって管理されることになるのと同様であるということである。[この運動というのは]脳に発して神経と筋肉を経由する運動、心臓に発して動脈を経由する運動、肝臓に発して静脈を経由する運動のことである(58)。いかなる明確な原理(アルケー)にもとづいて、以上のような説を取立てるに至ったのかという点については、多くの論考の中、とりわけ『魂の種類について』と題する論考の中で明らかにした通りである(59)。もっとも、魂(プシューケー)の本質的あり方[が何であるかという点]について、敢えて意見を表明するという事は、いかなる論考の中でも行ってこなかった。というのも、[魂の本質的あり方が]全く非物体的であるかという点についても、あるいは物的な何かであるかという点についても、完全に永遠的であるかという点についても、あるいは消滅しうるものであるかという点についても、図形的論証(60)を駆使して[それを証明して]きた人を、わたしは一人も発見したことがないからである。[そのことは]『魂の種類について』と題する論考中で詳細に論じた通りである。

## [注 解]

### 第一章

- (1) 「胚子」と訳したのは、古典ギリシア語では「タ・キュウーメナ」(τὰ κυούμενα)。この語句は「孕ませる」という意味の古典ギリシア語の動詞「キュエイン」(κυεῖν)の受動相の現在分詞中性複数形が定冠詞をともなって名詞化したものであって、字義通りには「孕まれたもの」という意味である。「キュエイン」という動詞から派生した語に「キューマ」(κύημα)という名詞がある。胎児を産む動物(いわゆる哺乳類)の場合には「キューマ」という語に代えて「エンブリュオン」(ἐμβρυον)という語が用いられることが多い。だが、両者は必ずしも厳密に使い分けられているわけではない。本翻訳では「エンブリュオン」という語には「胎児」という訳語をあてることにし、「キューマ」および「キュウーメナ」という語にはいずれも「胚子」という訳語をあてることにする。
- (2) 医学の分野においては、解剖(アナトミー ἀνατομή)によって得られた知見こそが理論的考察の出発点であるという考え方は、ガレノスの医学の根本原則の一つである。事実、ガレノスは、ヘロピロス(Herophilus, c.330-c.250 BC)やエラシストラトス(Erasistratos, c.320-c.240 BC)に代表される初期アレクサンドレイアの医学者たちの学問的貢献——人体の中樞器官にあたる脳の構造と機能の解明、静脈や動脈と区別される神経系組織の発見等——を継承しつつ、独自の発見を積み重ねていったというわけである。ここで、ガレノスは、自らの医学の根本原則に照らして、胚子の形成について論述してきた医学者たちと哲学者たちの主張内容を、それらが解剖学上の知見に全く依拠していないという理由で、厳しく批判している。同様の批判としては、本論考第二章 IV 664 Kのほか、『ヒポクラテスとプラトンの教説』第一巻第六章 V 187-188 K、同書第二巻第八章 V 283-284 K等を併せて参照。
- (3) ヒポクラテス(Hippokrates, c.460-c.375 BC)は、現在のトルコ共和国の西岸部にあたり、当時はイオニアと呼ばれていた地域に位置するコス島の同名の都市を拠点としていたコス医学派の医師の一人で、西洋医学史において「医学の父」と称される人物である。だが、ヒポクラテスという人物については、不明な点が多い。「ヒポクラテス医学文書」(Corpus Hippocraticum)として今日に伝わる医学文書は、執筆時期や成立の背景等を異にする七十余篇の医学書(本論考のつぎの параграфで論及される『子供の自然本性について』と題する著作も、この文書に含まれている)から構成されており、それらの医学書をすべて同一人物(ヒポクラテス)に帰すということは、そもそも不可能である。「ヒポクラテスの医学的方法」に論及したプラトンの中期対話篇『パイドロス』篇の一節(270b-271c)を手がかりとして、これらの医学書の中から「ヒポクラテスの真正作品」を特定するという作業が、古代医学研究における重要なミッションの一つとされていた時期もあった。けれども、この問題については、未解決なままである。
- (4) 『子供の自然本性について』と題する著作は、本来は『生殖について』および『疾病について』第四巻とともに、同一著者による一連の論考を構成していたと考えられる。これらの論考は、通常、ヒポクラテスが属していたコス医学派と競合関係にあったとされるクニドス医学派系の医学書に分類されてきた。この個所で、ガレノスは『子供の自然本性について』(Περὶ φύσεως παιδίου)という特定の表題の下に、この論考に論及している。以上のことは、すでにガレノスの時代には、この論考が単一の著作として流布していたことを示唆している。
- (5) ポリュボス(Polybos, fl. c.400 BC)は、ヒポクラテスに師事して医学を学んだ弟子の一人で、ヒポクラテスの娘婿にあたりとされる人物。ポリュボスは「ヒポクラテスの四体液理論」を展開していることで有名な『人間の自然本性について』と題する論考を著した(もともと、ガレノス自身は、この論考をヒポクラテスに帰している)。この個所は、『子供の自然本性について』と題する論考の著者がポリュボスであったという可能性を示唆する唯一の典拠にあたる。Nickel (2001), S.110は、この個所でガレノスが『子供の自然本性について』と題する論考の著者にあたる人物として、ヒポクラテスの名前と並んで、弟子ポリュボスの名前を挙げたのは「執筆の瞬間にふと思いついたこと」(ein Galen im Augenblick des Niederschreibens gekommener Einfall) (!)であろうと解している。しかし、ガレノスが『子供の自然本性について』と題する論考の注解(散逸)を著したという事実を照らして考えた場合、かれがこの論

考をきわめて重視していたことは明らかである。したがって、この論考をヒポクラテスの弟子ポリュボスに帰すということについても、この論考の伝承の背景を厳密にふまえた上での発言であると解するのが妥当である。

- (6) 「生殖液」と訳したのは、古典ギリシア語では「ゴネー」(γονή)。「精液」を意味する語としては「スペルマ」(σπέρμα)が一般的である。この語は、①植物の種子、②動物の雄が放出する「生殖液」、③「胚子」等を意味する。アリストテレスの発生理論においては、②が厳密な意味での「精液」にあたるもので、動物の雄のみが放出するとされている。雄の「生殖液」に対応するものとして、雌は胎児の体を作る「素材」(ヒューレー)にあたるものとして「月経血」(タ・カタメーニア τὰ καταμήνια)を提供するとされている(『動物の発生について』第一巻第十九章727a25-30を参照)。これに対して、『生殖について』・『子供の自然本性について』・『疾病について』第四巻から構成される一連の論考(本章注(4)を参照)の著者は、「生殖液」は男女両性から提供されるという考え方に立っている。ガレノス自身は、男女がともに「生殖液」を提供するという考え方を共有しているという点で、アリストテレスの立場と対立する。
- (7) 以下の引用については、『生殖について』・『子供の自然本性について』・『疾病について』第四巻から構成される一連の論考(本章注(4)を参照)の第十三章を参照。
- (8) 「尻蹴り跳び」(πρὸς πυγὴν πηδησαι)というのは、ペロポネソス半島南部の都市スパルタの女性たちが、体の鍛錬を目的として行っていたとされる運動の一種で、臀部を蹴るようにして足を跳躍させるというもの。アリストパネス(Aristophanes, c.450-c.385 BC)の喜劇『リュシストラテ』(『女の平和』)第八十二行を参照。

## 第二章

- (1) 「胎膜」と訳したのは、古典ギリシア語では「コリオン」(χόριον)。これは、動物の「胚子」を包み込んでいる「尿膜」(あるいは、成長がより進んだ段階での「漿尿膜」や「羊膜」)を指していると考えられる。
- (2) 「本質的あり方」と訳したのは、古典ギリシア語では「ウーシアー」(οὐσία)。この語は「ある」「存在する」という意味の古典ギリシア語の動詞「エイナイ」(εἶναι)の現在分詞の女性単数形(οὐσα)が名詞化したものである。「ウーシアー」というのは、古代哲学においては、とくにアリストテレスの哲学における最重要概念の一つで、事物の「本質に即したあり方」を意味する。本論考の翻訳では、論述の文脈に応じて、「本質的あり方」という訳語のほかに、この「ウーシアー」という語の伝統的な訳語にあたる「実体」という訳語をあてている。
- (3) 「胚子」を包み込んでいる「胎膜」とその内部にある静脈と動脈のこと。
- (4) 「胎膜」を指している。
- (5) ガレノスは、解剖学を医学の分野における最重要部門の一つに位置づけた。この点については、本論考第一章注(2)を参照。けれども、ガレノス自身には、医学研究の一環として、ヒトの生体を含む人体の系統解剖を実施した経験はなかった。ヒトの生体の構造と機能に関する貴重な医学的知見の多くは、前三世紀前半の初期アレクサンドレイアのきわめてラディカルな学問的環境の下で、ヒトの生体を含む人体の解剖に積極的に取り組んだとされる医学者たち(ヘロピロス、エラストラトスがその代表)によって提供された。ヘロピロスは、人体解剖によって明らかにしたヒトの男女の生殖器官の構造と機能に関する正確な知見をもとに、当時としては、最も高度なヒトの発生理論を展開したとされる。ガレノスは、ヒトの発生に関するこれらの医学者たちの学問的功績を継承するとともに、かれ自身が「ヒトの自然本性(ピュシス)からさほど遠くない」と考えた、ヒト以外の動物を対象とする解剖を実施し、そこから得られた数多くの知見をヒトの生殖発生に関する事象の説明に転用することを試みたというわけである。事実、Nickel(2001), S.112も指摘するように、成長をへたものとして、ここに記されている「胎膜」の特徴は、ヒトの胎盤それ自体というよりも、ここでガレノスが名前の挙げている動物の胎盤の特徴に合致している。
- (6) 母体のこと。
- (7) 諸写本では「これらの脈管のみで子宮に接触しているほかに、どこかの場所で子宮に接触している(ψαύει κατά τι τῆς μήτρας)ということもない」という原文を伝えているが、これは「この「胎膜」が、複数の動脈および静脈を介して、子を孕んでいる動物の子宮に合着している(συμπεφυκός τῇ μήτρᾳ)

のが見える」という、少し前の論述内容と矛盾する。そこで、底本の校訂に従って「これらの脈管のみで子宮に合着しているほかに、どこかの場所で子宮に合着している (συμπέφυκε κατά τι ταις μήτραις) ということもない」という読みを採用する。

- (8) 本章第一パラグラフ中の「これらの脈管の生成の起始 (アルケー) にあたるのは…子宮の動脈と静脈であって…」という論述部分を指していると考えられる。
- (9) 底本の校訂に従って「別のものが生まれてくる」(ἐτεραι γίνονται) という語句を補って読む。
- (10) 底本の校訂に従って「一つに合わさって…ほかのものが…」(ένουμένων … ἄλλαι …) という語句を補って読む。
- (11) 「臍動脈」および「臍静脈」を指していると考えられる。ヒトの胎児の場合、「臍動脈」は二本存在するのに対して「臍静脈」は一本のみである。ガレノスの論述内容は、ヤギ、ヒツジ、ウシ等の反芻動物の胎児の「臍帯」の構造や機能と一致している。この点については、本章注 (5) を併せて参照。
- (12) 「尿管管」(ウーラコス οὐραχός) というのは、胎児の膀胱と「尿管」(本章注 (14) を参照) を結合している管のことで、尿を膀胱から「尿管」へと送る働きを担っている。生後、この管は閉鎖する。
- (13) 本章注 (11) を参照。
- (14) 「尿管」(ヒュメーン・アツラントエイデース ὑμὴν ἀλλαντοειδής) という語は、ガレノスの説明にもあるように、この被膜の形状が「腸詰」(ἀλλας) に似ていることに由来する。「尿管」を意味する英語 allantoid は、ἀλλαντοειδής という古典ギリシア語から派生したもの。「尿管」は胚子の形成段階から誕生までの全期間を通して、膀胱から「尿管管」を通して送られてきた尿をそこに受け入れるという重要な働きを担っている。この働きによって、尿は「羊膜」(本章注 (15) を参照) の開口部へ向かうことがなくなるので、胎児の体表と「胎膜」内の静脈は尿から守られるというわけである。哺乳類の場合、「尿管」は「漿膜」の一部と接して胎児性胎盤となり、子宮壁が変化して生じた母性胎盤に接着して胎盤全体を形成する。ヒトの胎児の場合、ガレノスが記述しているような「尿管」は存在していない。かれの論述内容は、ヤギ、ヒツジ、ウシ等の反芻動物の胎児の付属器官の構造や機能と一致している。この点については、本章注 (5) を参照。
- (15) 「羊膜」(ヒュメーン・アムネイオス) (ὑμὴν ἀμνείος) というのは、膜組織の一番内側にあつて胚子の周囲を取り巻いている被膜。胚子形成の最初期には「生殖液」から分泌される蒸気状の物質を溜めるという役割を担うのに対して、胚子が成長してくると、胎児が排泄する「汗」(「羊水」にあたるもの) を受け入れるための容器としての役割を果たすとされている。「羊膜」を意味する英語 amnion は、ἀμνείος という古典ギリシア語から派生したもの。因みに、この「羊膜」の位置や構造や働きをはじめとして、胎児の「臍帯」や「尿管管」の構造や機能をめぐるガレノスの記述——「羊膜」内の液体 (すなわち「羊水」) を「汗のようなもの」とする説明等も含めて——は、後一世紀後半のエベソス出身の医学者ルフス (Rufus Ephesius) の『人体の諸部分の呼称について』と題する論考に負うところが大きいとされている。もっとも、ルフス自身は「尿管」が存在することを認識していなかったようで、胎児の尿を「尿管管」を通して受け入れる働きをするのは「胎膜」それ自体であるとしている。
- (16) 「胎児を製作したもの」と訳したのは、古典ギリシア語では「ト・デーミウールゲーサン」(τὸ δημιουργήσαν)。これは「製作する」「創造する」という意味の「デーミウールゲイン」(δημιουργεῖν) という古典ギリシア語の動詞の能動相のアオリスト分詞中性単数形が定冠詞をともなって名詞化したものである。この動詞の名詞形にあたる「デーミウールゴス」(δημιουργός) という語も、本論考の論述に確認される。本論考第五章 IV 682 K では「精液 (スベルマ) が製作者 (デーミウールゴス) の理 (ロゴス) を持つことになる」とされている。
- (17) 本章注 (11) を参照。
- (18) 母体のこと。
- (19) ガレノスの説明によれば、胎児の体の諸器官のうちで最初に生成するのは、アリストテレスが主張している(『動物の発生について』第二巻第一章 735a23-26、および第四章 740a17-18 等を参照) ように心臓ではなく、肝臓であるとされている。当初、ガレノスは、心臓の生成を肝臓と同じように、胚子形成の最初期に位置づけていた。その後、肝臓が心臓に先立って、胚子形成の最初期に生成するという方向に見解を改めたとされている。ガレノスは、以上の見解の論拠として、この時期に胚子は植物と同じよう

な仕方管理されているので、この段階で心臓は必要でないという点を挙げている。この点については、本論考第三章 IV 663-664 K を参照。

- (20) お湯の熱の作用によって「血液が凝固する」のと同じように、肝臓の形成も血液が子宮の熱の作用をこうむって凝固することによって起こること。
- (21) ここで、ガレノスは、胚子の体の諸部分・諸器官のうちで最初に形成される肝臓を、同じように血液を素材として形成されるもの（本章注 (22) を参照）と明確に区別している。
- (22) ガレノスは、胎児の体の諸部分・諸器官を (A) 多様な肉質、筋肉組織、脂肪等、血液を素材として形成されるものと、(B) 動脈や静脈、神経系組織、被膜組織、靭帯・腱、骨・軟骨、脳等、「精液」を素材として生成するものに大別している。ガレノス『精液について』第一巻第五章 IV 528-532 K を参照。以上の考え方は、男（雄）が放出する「精液」は、女（雌）から提供される素材としての「月経血」において「形相」（エイドス）を実現させるための運動の始原（アルケー）を伝えるという、アリストテレスの見解と真正面から対立するものである。
- (23) 「これらの脈管を形成した「精液」（スベルマ）」（τὸ διαπλάσαν αὐτὰ σπέρμα）という表現には、「精液」（あるいは「生殖液」）は、(A) これらの脈管が最初に生成するときの素材にあたるという意味（本章注 (22) を参照）と同時に、(B) それらへの栄養供給や成長等を司る原理——いわば「始動因」——として働くという意味が含まれている。(B) の意味については、本論考第五章 IV 682 K を参照。
- (24) 諸写本では「生み出される」（γεννάσθαι）という意味の古典ギリシア語の動詞の不定法を伝えているが、底本の校訂に従って削除する。

### 第三章

- (1) 「能力」と訳したのは、古典ギリシア語では「デュナミス」（δύναμις）。「精液（スベルマ）の能力」という表現には「精液」が胚子の形成において「始動因」として働くという意味が含まれている。この点については、本論考第二章注 (23) を併せて参照。
- (2) 本論考第二章注 (11) を参照。
- (3) 本論考第二章注 (12) を参照。
- (4) 本論考第二章 IV 658 K の論述内容を指していると考えられる。
- (5) この「〔二本に分岐した静脈のうちの〕もう一方の部分」というのが、肝臓の下中央部の肝門に位置する「門脈」（vena portae）に対応していることは、この直後の文脈で「その部分に密着して、胃、脾臓、また何重にも折れ曲がった腸の構造全体、大綱、および「直腸」と呼ばれているもの〔が生成してくる〕」と説明されていることから明らかである。これらの腹部器官に発して、門脈につながる静脈系血管を通して、静脈血が肝臓へと集められるというわけである。
- (6) 「腸間膜」（τα・μεσεντερια τὰ μεσεντέρια）というのは、小腸の一部（空腸および回腸）を包み込んで、それらを後部の腹壁に繋いでいるヒダ状の膜組織のこと。
- (7) 小腸と大腸の回旋構造のこと。
- (8) 「大綱」（τὸ ἐπιπλοον τὸ ἐπίπλοον）というのは、胃の下側部分（大弯）から下方に垂れ下がった腹膜組織のこと。そのため「大綱膜」とも呼ばれる。なお、諸写本では「エビプロオン」という語の直前に定冠詞の中性単数対格形（τὸ）を伝えていないが、底本の校訂に従って補う。
- (9) 仙骨を指している。因みに、仙骨のラテン語の名称「オース・サクルム」（os sacrum）は「神聖な骨」の意味。
- (10) 「最大の動脈」（ἡ μεγίστη ἀρτηρία）というのは、大動脈（aorta）のこと。
- (11) 母体のこと。
- (12) 下大静脈の上のほうの部分。
- (13) 本章 IV 664 K を参照。
- (14) 『生殖について』・『子供の自然本性について』・『疾病について』第四巻から構成される一連の論考第十三章からの引用（本論考第一章 IV 654-655 K）を参照。この箇所では、ガレノスは引用文中の「赤くて丸みを帯びたもの」（ἐρυθρόν καὶ στρογγύλον）を「胎膜」を通して見える未分化な状態の肝臓を指していると解している。けれども、この「赤くて丸みを帯びたもの」という表現は、以上の一連の論考の

著者によって、六日目に子宮から脱落した「生殖液」の性状を全体として特徴づける目的で用いられているので、ガレノスの解釈と合致しない。

- (15) ガレノスは、肝臓、心臓および脳の三器官を人体における主要三器官として位置づけている。その理由は、以上の三器官にそれぞれ「魂」を構成する三部分（「栄養摂取のための部分」「気概的部分」および「理知的部分」）が宿ると考えたことによる。本論考第五章 IV 685 K および第六章最終部 IV 701 K で、ガレノスはこれらの三器官を体の「三つの始原」（アルカイ ἀρχαί）と位置づけている。
- (16) 本論考第二章注（5）を参照。
- (17) 『精液について』第一巻第八章 IV 539–541 K の論述内容を指していると考えられる。そこでは、心臓、肝臓、および脳の順に、三つの主要器官が胚子の体内に生成していく過程が論じられている。ガレノスの説明によれば、これら三主要器官の生成は「動物を形成する能力（デュナミス）」が最初に行う仕事であるとされている。
- (18) ガレノスの論調では、以上の見解が、あたかも当時の医学者たちや哲学者たちの「公式見解」（official doctrine）であったかのような印象を受ける。それは措くとして、アリストテレス『動物の発生について』第二巻第三章 736b8–13 やストア派の著作（クリュシッポス断片 II 806 [SVF]）等に、母胎内の胎児の生育過程を植物の生態と関連させる記述が見られる。
- (19) この個所の「肝静脈」というのは、下大静脈の上のほうの部分のことを意味している。
- (20) エラシストラトスは、エーゲ海南西海域に位置するケオス島の都市イリウス出身で、ヘロピロス（本論考第五章注（1）を参照）とともに、初期アレクサンドレイアの医学者たちを代表する人物の一人。クニドス医学派の医師クリュシッポス（Chryssippos, 生没年不明）に師事して医学の研鑽を積んだ後、シリアの首都アンティオケイアに赴き、セレウコス王朝の宮廷医として活動した後、アレクサンドレイアに移住して、医学研究に専念したとされる。
- (21) 「氣息」と訳したのは、古典ギリシア語では「プネウマ」（πνεῦμα）。古代哲学の文脈においては、生命原理としての「魂」（プシューケー ψυχή）を構成する物質等として、きわめて重要な意味を与えられてきた。古代医学においては「ヒポクラテス医学文書」の『神聖病について』と題する論考の著者（ヒポクラテスであるかどうかは不明）が、呼吸によって外気から取り入れられ、人体の脈管内を流れる物質にあたるものとして「氣息」を明確に位置づけている。因みに、動脈を流れているのは「氣息」のみであるという見解を示したのは、ヒポクラテスと同じコス島出身の医学者ブラクサゴラス（Praxagoras, fl. 300 BC）が最初である。エラシストラトスの見解については、ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説』第一巻第六章 V 184–185 K のほか、本論考本章 IV 671 K を併せて参照。
- (22) 本論考第二章注（5）を参照。
- (23) 『呼吸の用途について』と題する論考、および『脈拍の用途について』と題する論考への論及であると考えられる。けれども、これらの論考中には、生成の最初期における胚子に固有の状況として、以下でガレノスが説明しているような論述は見出せない。
- (24) ガレノスが植物の生成についての知見を得ることの重要性を強調するのは、これ以降の論述の内容からも明らかのように、生成の最初期における胚子に固有の状況が植物の生態と原理的に同一であるという認識に立っているからである。以上の点については、『精液について』第一巻第九章 IV 544–546 K を併せて参照。
- (25) 「植物的魂」（ピュティケー・プシューケー φυτική ψυχή）のこと。
- (26) 諸写本では「理解する」という意味の古典ギリシア語の動詞の不定法「ギグノースケイン」（γινώσκειν）の直前に定冠詞の中性単数形（τὸ）を伝えているが、底本の校訂に従って削除する。
- (27) クリュシッポス（Chryssippos, c.280–c.207 BC）は、小アジアのキリキア地方の都市ソイ出身で、初期ストア派を代表する哲学者の一人。ストア哲学の理論と方法論の体系化等に努めた。なお、ストア派は、生体としての植物を原理的に支配しているものを「魂」ではなく「自然」と呼んでいたとされる。この点については、ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説』第六巻第三章 V 521 K 等を参照。
- (28) 「栄養摂取のための魂」（トレプティケー・プシューケー θρεπτική ψυχή）については、アリストテレス『魂について』第二巻第四章 415a23 以下、および『動物の発生について』第二巻第三章 736a35 以下等を参照。論述の文脈によって、アリストテレスは、この魂の部分（または能力）を意味するのに「栄養摂取のた

- めのもの」(ト・トレプティコン τὸ θρεπτικόν) という語を用いている。『動物の発生について』第二巻第一章 735a16 以下等を参照。
- (29) 「欲望的魂」(エピテューメーティケー・プシューケー ἐπιθυμητικὴ ψυχὴ) については、プラトン『国家』篇第四巻第十四章 439d 以下を参照。なお、プラトン自身は、当該箇所において「欲望的魂」という表現ではなく「欲望的部分」(ト・エピテューメーティコン τὸ ἐπιθυμητικόν) という表現を用いている。なお、本章注 (30) を併せて参照。
- (30) 「気概的部分」(ト・テューモエイデス τὸ θυμοειδές) と「理知的部分」(ト・ロギスティコン τὸ λογιστικόν) というのは、プラトンが、いわゆる「魂の三部分説」に立って、人間の「魂」を構成している三つの部分(または能力)にあたるものとして区別したものである。ガレノスの説明によれば、植物はこれらの二つの部分を持たないので、植物には感情や思考の働きは存在しないということになる。
- (31) 「活動」と訳したのは、古典ギリシア語では「エネルギー」(ἐνέργεια)。字義通りには、事物が「働き(エルゴン ἔργον)のうち」(エン ἐν)にあること」という意味。アリストテレスの哲学においては、「可能状態」(デュナミス)に対して「実現状態」(エネルギー)——事物の在り方や働きが実現している状態のこと——を意味する。この一節の「自然(ピュシス)の活動」というのは、生体としての植物を原理的に支配しているものが、その能力(デュナミス)を発揮している状態のことであって、アリストテレスの「エネルギー」概念に通じるものがある。
- (32) 根にあたる部分と茎にあたる部分(樹木の場合には、幹に成長する)を指している。
- (33) ガレノスは、母体内で胚子が完成に向けて成長していく過程を三つの時期に分けて、段階的に説明するとともに、母体から誕生した後の発育の段階を第四の時期にあたるとしている。第一の時期にあたるのは「臍動脈」「臍静脈」と「胎膜」および肝臓が形成されていく段階である。この時期には、心臓の形成には至らないとされている(本論考第六章 IV 698 Kを参照)。生成のこの段階においては、胚子の在り方は植物と同じであるため、この時期にはまだ心臓を必要としないというわけである。第二の時期にあたるのは、心臓が形成されていく段階である。心臓の活動がそこに加わることによって、胚子はたんに植物としてではなく「動物」(ゾーオン ζῷον)としても管理される段階へ移行するとされる(本章 IV 670 Kを参照)。第三の時期にあたるのは、脳および顔面に位置する体の諸部分(視覚器官にあたる眼、聴覚器官にあたる耳等)が形成されていく段階である(本章 IV 672 Kを参照)。なお、以上の説明の仕方は、『精液について』第一巻第九章 IV 542-544 Kにおいてガレノスが試みている説明の方式と明らかに異なるものである。『精液について』の当該箇所では、母体内で胚子が形成されていく過程が、①母体内の形成物がまだ「生殖液」(ゴネー)の状態にある段階、②胚子が血液で満たされている一方で、心臓、脳、肝臓の三器官が分節化しておらず、はっきりとした形状をなしていない段階、③これらの三器官を明確に確認することのできる段階、④胎児の体が完成に至った段階の四段階に分けて説明されている。これに対して、本論考では、肝臓、心臓、脳の順に、胚子の体の三主要器官のおのおのが形成されていく時期を基準として、母体内で胚子が成長していく過程を段階的に説明しているという点が特徴的である。
- (34) 本論考第一章注 (2) 及び第二章注 (5) を参照。
- (35) 本章 IV 660-661 Kの論述内容を指していると考えられる。
- (36) 「門脈」を指している。本章注 (5) を参照。
- (37) 「肝静脈」を支脈として持つ下大静脈を指している。
- (38) 「肝臓の二つの門」のうち、「[肝臓の] 下側の門」というのが肝門 (porta hepatis) にあたり、「[肝臓の] 上側の門」というのは、下大静脈の支脈が肝臓に入って「肝静脈」を形成している場所を指していると考えられる。
- (39) 「原因根拠」と訳したのは、古典ギリシア語では「アイティアー」(αἰτία)。字義通りには「あることに関して責任がある」という意味。この箇所の「原因根拠」というのは、後続の論述内容からも明らかのように、アリストテレスの「四原因」(始動(起動)因、形相因、素材(質料)因、目的因)のうち目的因にあたるものである。
- (40) 大静脈のこと。
- (41) 「空の静脈」というのは、古典ギリシア語では「コイレ・プレプス」(κοίλη φλέψ)。この語は、プラクサゴラス(本章注 (21) を参照)が静脈と動脈を別々の脈管系組織として区別する以前から、人体内

の最重要な脈管の一つを指す語として広く用いられてきた。「ヒポクラテス医学文書」中の『神聖病について』第三(六)章には、肝臓に起始を持つ脈管系組織を指すのに、この語が用いられている。また、同文書所収『人体の部位について』第三章には、この脈管をはじめとして、人体内の脈管系組織に関する詳細な記述が見られる。

- (42) 「肝静脈」というのは、古典ギリシア語では「ヘーパティーティス・プレプス」(ήπατιτις φλέψ)。字義通り「肝臓(ヘーパル ήπαρ) からくるもの」の意味。なお、この個所のガレノスのヒポクラテスへの論及は、「ヒポクラテス医学文書」中の『エビデミアイ(流行病)』第二卷第四章第一節の論述(ほぼ同内容の論述が、同医学文書所収『骨の自然本性について』第十章にも見られる)を典拠としていると考えられる。
- (43) 下大静脈の下のほうの部分。
- (44) 下大静脈の上のほうの部分、および上大静脈。
- (45) 腹膜のこと。
- (46) 心膜のこと。
- (47) 「門脈」を指している。
- (48) この「肝静脈」というのは、下大静脈の上のほうの部分のことを意味している。
- (49) 底本の校訂に従って「…背骨周辺の場所へ」という訳語に対応する古典ギリシア語の語句の直前に定冠詞の女性複数対格形(τὰς)を補う。
- (50) 「胸郭」(トーラクス θώραξ)は、その全体が横隔膜よりも上に位置しているため、この個所の説明は事実と合致しない。写本伝承の過程で、原文が損なわれたということも考えられる。
- (51) 底本の校訂に従って「素材」(ヒューレーン ύλην)の直前に定冠詞の女性単数対格形(τήν)を補う。
- (52) 底本の校訂に従って「形成されていく」(ディアブラッテタイ διαπλάττεται)と読む。
- (53) 大動脈のこと。
- (54) ガレノスは、心臓の左心室を大動脈および人体のすべての動脈系組織の起始にあたるとともに「生来の熱」(シュンピュトン・テルモン σύμφυτον θερμόν——本章注(63)を参照)が宿る場所にあたることを考えていた。「動脈血が静脈血よりも熱い」とされるのは「生来の熱」の作用によるものである。なお、胚子の体内を心臓に向かって上に伸びていく大動脈は「臍動脈」を通して母体本体の動脈系組織と連結しているので、そこを流れる血液は静脈内の血液よりも熱いというわけである。
- (55) 「心室」と訳したのは、古典ギリシア語では「コイリアー」(κοιλία)。字義通りには「窪み」や「空洞」という意味。古代医学においては「胃腸」「腹腔」等、人体の複数の部位を意味する語として広く用いられた。
- (56) ガレノスによれば、「脈拍」(スピュグモイ σφυγμοί)というの、心臓本体に内在している「能力」(デュナミス)が、動脈の内壁を通して、体中のすべての動脈に浸透することによって引き起こされる運動であるとされている。ガレノス『脈拍の用途について』第四卷第二章 V 164 K および同書第五卷第五章 V 168-169 K を参照。
- (57) 古典ギリシア語では「ケーマー」(χήμη)。ザルガイ科あるいはバカガイ科の貝類のこと。アリストテレス『動物誌』第五卷第十五章 547b13 を参照。
- (58) 古典ギリシア語では「ケーリュクス」(κήρυξ)。フジツガイ科のホラガイ等、またはエゾバイ科の貝類のこと。アリストテレス『動物誌』第四卷第四章 528a10 を参照。
- (59) 古典ギリシア語では「ピーネー」(πίνη)。アリストテレス『動物誌』第五卷第十五章 547b15 を参照。
- (60) 古典ギリシア語では「オストレイオン」(όστρειον)。アリストテレス『動物誌』第五卷第十五章 547b20 を参照。
- (61) 古典ギリシア語では「レバス」(λεπάς)。アリストテレス『動物誌』第四卷第四章 528b1 を参照。
- (62) この個所で、ガレノスが具体的に言及している生物(貝類)は、アリストテレスの生物分類によれば、「殻皮動物」(タ・オストラコデルマ τὰ όστρακόδεσμα)と総称されているものに属している。『動物誌』第七卷(八卷)第一章 588b16 以下では、歩行可能な動物と比較した場合、「殻皮動物」はむしろ植物に近いとされている。この種の動物は無血であるとともに「心臓に類比的なもの」を持つだけであって、発生の仕方についても、雄と雌の交接によらない「自然発生」という方式をとるとされている。

- (63) 「生来の熱」のこと。ガレノスによれば、この「生来の熱」というのは、有血動物に固有のものであって、心臓の左心室に起源をもっており、そこから動脈系組織を通して全身に行きわたるとされている。これに対して、静脈を流れている血液や肝臓に含まれるとされている「生来の熱」(シユンピユトス・テルモテース σύμφυτος θερμότης / エンピユトス・テルモテース ἔμφυτος θερμότης) というのは、植物を含むすべての生物に共通に存在している原理であって「栄養摂取のための魂」にあたるものことである。この点については、ガレノス『自らの学説について』第十三章 (Vivian Nutton (ed.), *Galen De Propriis Placitis, Corpus Medicorum Graecorum* [CMG] V 3, 2, Akademie Verlag (Berlin, 1999), pp.102–104) を参照。
- (64) 血液(厳密には動脈血)のこと。
- (65) エラシストラトス(本章注(20)を参照)は、動脈内を流れているのは「氣息」のみであると考えていた。本章 IV 664 K を参照。
- (66) 以下の引用については、プラトン『ティマイオス』篇第三十一章70a7–b3を参照。
- (67) 本章注(33)を参照。
- (68) ガレノスによれば、視覚や聴覚等の「感覚」(アイステーシス αἰσθησις) や体の運動をはじめ、「推論」(ロギスモス λογισμός) や「記憶力」(ムネーメー μνήμη) 等については、脳に座を占めている「魂」の「理知的部分」(ト・ロギステイコン τὸ λογιστικόν) に帰属する能力であるとされている。ヒトがこれらの能力を十全に働かせることが可能となるためには、それらに固有の器官としての脳が完成することを前提としている。本章注(72)を併せて参照。
- (69) 「[頭の] 前頂部」と訳したのは、古典ギリシア語では「ブレグマ」(βρέγμα)。前頭骨の一部で、「ひよめき」と呼ばれているもの。因みに、アリストテレス『動物の発生について』第二巻第六章744a24以下に、この個所と同じような趣旨の論述が見える。
- (70) この「脳の動き」について、ガレノスは、一方において、動脈の「脈拍」との関連を示唆する(『人体の諸部分の用途について』第十三巻第八章 IV 113 K を参照) とともに、他方においては、それを呼吸の運動と関連づけて説明している。
- (71) 本章注(33)を参照。
- (72) 以上の一節中で「器官」と訳したのは、古典ギリシア語では「オルガノン」(ὄργανον)。字義通りには「道具」の意味。同様の考え方については、アリストテレス『動物の発生について』第四巻第一章766a5以下を参照。
- (73) ガレノス「魂の諸能力は体の混和状態に付帯するという」と題する論考への論及であると考えられる。
- (74) 「混和状態」と訳したのは、古典ギリシア語では「クラシス」(κράσις)。ヒトの体を構成している四基本性質(「熱」「冷」「乾」「湿」)の比率のこと。ガレノスによれば、「魂」の各部分に帰属する能力は、各部分が座を占めている三器官(脳、心臓、および肝臓)の「混和状態」に左右されるというわけである。

#### 第四章

- (1) クリュシッポスについては、本論考第三章注(27)を参照。
- (2) 「ペリパトス派」(Περιπατητικοί) というのは、アリストテレスがアテナイ郊外に創設した学園リュケイオンにおいて活動した哲学派のこと。
- (3) 「神経」と訳したのは、古典ギリシア語では「ネウロン」(νεῦρον / 複数形は νεύρα)。一般に「神経の発見」については、ヘロピロスやエラシストラトスに代表される初期アレクサンドレイアの医学者たちの学問的貢献に負うところが大きいとされている。この発見以前の時代には、「ネウロン」という語は「筋」「腱」「靱帯」等を指す語として、広く用いられていた。たとえば、アリストテレス『動物誌』第三巻第五章515a27以下を参照。因みに、ガレノスは、主著『ヒポクラテスとプラトンの学説』第一巻第六章～第十章 V 187–208 K 等において、心臓を「魂」の座として位置づけるというアリストテレスの動物学モデルや、クリュシッポスが自らの「魂」論を展開するのに依拠したとされるブラクサゴラス(本論考第三章注(21)を参照)の「心臓中心主義」に立った人体モデルを批判するのに、「神経の発見」以降の解剖学上の知識を前提としている。けれども、このような批判はいささか公平さを欠いている。
- (4) 心臓のこと。
- (5) (ア)～(ウ)に関して「ペリパトス派の哲学者たち」の見解にあたるものとして、ガレノスが典拠とし

ているのは、アリストテレスの動物学著作における論述の内容である。(ア)に関しては、『動物の発生について』第二巻第四章 740a17-18 (「それゆえ、すべての有血動物において、最初に明瞭に分化したかたちをとって現れるのは、心臓である」)のほか、同書第二巻第一章 735a23-26 等を参照。(イ)については、同書第二巻第四章 740a18-19 (「なぜなら、心臓は〔動物の体の〕同質部分の始原であるとともに、非同質部分の始原でもあるから」)等を参照。(ウ)については、同書第二巻第四章 740a22-23 (「心臓が血管(プレベス φλέβες [ガレノスの用語では「静脈」])の始原でもあるのはそのためである」)および『動物の諸部分について』第三巻第四章 666b13-16 (「心臓は筋(ネウラ νεῦρα [ガレノスの用語では「神経」])を多く含んでおり、それは理に適っている」)等を参照。これに対して、クリュシッポスおよびストア派の見解にあたるものとしては、かれらの著作は、その大半が散逸しているので、ガレノスが典拠としたものを具体的に挙げることはできない。(ウ)に関しては、あくまでも間接的典拠として、ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説』第一巻第六章 V 187 K を参照。

- (6) 「先の論述において示した」とあるが、以下の説明の中で、少なくとも専門技術者による製作に関わる論点については、本論考のこれまでの論述には見出せない。
- (7) 本論考第二章注 (22) を参照。
- (8) ガレノス『精液について』第一巻第五章 IV 528-532 K の論述内容を指していると考えられる。
- (9) 「動物の〔体の〕諸々の部分のうちで最初に生じるもの」として、心臓にかえて、(a)「胎膜」や (b) 肝臓——ガレノスの発生理論においては、これらの器官は心臓よりも先に生成するとされている——を想定した場合、(a) に関しては、新生児はもはや「胎膜」と結合していないので、これを体の管理のための原理にあたるものと考えことは不合理である。一方、(b) 肝臓は「静脈」の起始ではあるが、「神経」を通して体と繋がっているわけではないので、これを体の管理のための原理とみなすことも不合理であるということ。
- (10) ストア派の哲学者たちは「自然と調和して生きる」(ὁμολογουμένως τῇ φύσει ζῆν) ということ、人生の目的(テロス)としての「幸福」(エウダイモニーア—εὐδαιμονία)の実現のために目指すべき方向として位置づけた(クリュシッポス断片 III 12b [SVF])。この個所で、ガレノスは、ストア派の倫理学の伝統的な考え方を引き合いに出しつつ、かれらの「心臓中心主義」に立った一元的な「魂」論を批判の対象としているわけである。
- (11) 「行為」と訳したのは、古典ギリシア語では「プラクシス」(πράξις)。人間の「行為」というのは、倫理学の探究対象となるものである。アリストテレス『ニコマコス倫理学』第一巻第三章 1095a5-6 等を参照。
- (12) ストア派の哲学者たちのこと。事実、クリュシッポスは、弁論家や詩人たちをはじめとして、専門的知識を持たない人々の言説や語義論を自らの論証の「前提」(レーンマタ λήμματα)にあたるものとして立てたとされている。この点については、ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説』第二巻第二章 V 213 K 以下、同書第三巻第四章 V 314 K 以下等を参照。
- (13) 「不明なもの」(タ・アデーラ τὰ ἄδηλα) というのは、解剖による裏付けを欠いているために、たんなる憶測の域を出ないものこと。
- (14) 「麻痺状態」というのは、古典ギリシア語では「バラリュシス」(παράλυσις [この個所では、動詞 παραλύειν のアオリスト受動分詞の中性単数形が用いられている])。体の左右いずれかの側の「神経」の働きが損なわれた結果、体の左右いずれかの側の感覚や運動機能が失われた状態のこと。これに対して、「卒中」(アポブレークシア—ἀποπληξία) というのは、体の左右両側の「神経」の働きが損なわれた結果、体の左右両側の感覚や運動機能が失われた状態のこと。
- (15) 「選択的判断にもとづく活動」のための運動(すなわち、随意運動)のこと。
- (16) プラクサゴラス(本論考第三章注 (21) を参照)によれば、心臓に起始を持つ動脈は「神経」のような形状をしているが、中空であって、体の中を進んでいくにつれて分岐して、体の末端部に達すると「神経」に変化するとされている。ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説』第一巻第六章 V 188-189 K を参照。
- (17) 本章注 (10) を参照。
- (18) ここで「無益なもの」(アクレーストン ἄχρηστον) とされているのは、魂の「指導的部分」(ト・ヘーゲモニコン τὸ ἡγεμονικόν) が体のどの部位に宿るかという問いのこと。人生の目的としての「幸福」の実現という、ストア派の哲学者たちが目指したような倫理的課題の探究は、この問いの解明とは無関係に

可能であるというわけである。ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説』第九卷第七章 V 777-779 K を参照。

- (19) 「指導者」と訳したのは、古典ギリシア語では「ヘーゲモーン」(ἡγεμών)。魂の「指導的部分」(本章注(18)を参照)等と同じく、ストア派に特有の表現の一つである。
- (20) 「疾患」と訳したのは、古典ギリシア語では「パトス」(πάθος)。字義通りには「能動」に対する「受動」を意味する。疾患というのは、ヒトの体が「異常を被ること」であるから、この語が「疾患」という意味に転用されたというわけである。
- (21) 「狂乱」というのは、古典ギリシア語では「マニアー」(μανία [この個所では、動詞μαίνεσθαιの現在分詞の男性複数形が用いられている])。「譫妄性疾患」(本章注(24)を参照)と同様に、錯乱の症状を特徴とするが、発熱をとまなうことはないとされている。「ヒポクラテス医学文書」中の『神聖病について』第十四章(十七)章後半から第十五(十八)章にかけて、この疾患に特有の症状やそれが起因する原因等についての詳細な記述が見られる。
- (22) 「憂鬱症」というのは、古典ギリシア語では「メランコリアー」(μελαγχολία [この個所では、動詞μελαγχολᾶνの現在分詞の男性複数形が用いられている])。「メランコリアー」というのは、「黒胆汁(メライナ・コレー μέλαινα χολή)という体液に起因する疾患」の意味。この疾患は抑うつ状態等を特徴とするとされていることから、本翻訳では「憂鬱症」という訳語をあてた。
- (23) 現代の「認知症」(dementia)を思わせる疾患で「モーローシス」(μώρωσις)と呼ばれていたものに特有の症状。
- (24) 「譫妄性疾患」というのは、古典ギリシア語では「プレニーティス」(φρενίτις [この個所では、動詞φρενιτίζεινの現在分詞の男性複数形が用いられている])。高熱をとまなう、錯乱の症状を特徴とする疾患で「ヒポクラテス医学文書」中の医学書の中にも、多数の報告等が確認される。『エビデミアイ(流行病)』第三卷第六章、同書同卷第十七章「症例四」等を参照。
- (25) 「嗜眠症」というのは、古典ギリシア語では「レータルゴス」(λήθαργος)。発熱をとまなう、嗜眠症状に加えて、理性的判断や記憶の喪失を特徴とする疾患。「ヒポクラテス医学文書」中の『エビデミアイ(流行病)』第三卷第十七章「症例十一」等を参照。
- (26) 「癲癇(てんかん)」というの、古典ギリシア語では「エPILEΨΙΑー」(ἐπιληψία [この個所では、受動形容詞 ἐπιληπτόςの男性複数形が用いられている])。ヒポクラテスの時代から広く確認されていた疾患の一つで、全身にわたる痙攣(スバモス)をとまなう、感覚や思考の働きが著しく阻害されることを特徴とする。「ヒポクラテス文書」中の『神聖病について』と題する論考の著者は、この疾患が脳の異常に起因すると主張している。同書第三(六)章等を参照。
- (27) 本章注(14)を参照。
- (28) ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説』第九卷第七章 V 779-782 Kの論述内容を指していると考えられる。

## 第五章

- (1) ヘロピロスは、ボスポロス海峡を挟んで、ビュザンティオン(現在のイスタンブール)の対岸に位置していた都市カルケドン出身で、エラシストラトス(本論考第三章注(20)を参照)とともに、初期アレクサンドレイアの医学者たちを代表する人物の一人。プラクサゴラス(本論考第三章注(21)を参照)に師事して医学の研鑽を積んだ後、アレクサンドレイアに移住して、医学研究に専念したとされる。
- (2) 体の特定の部分の成り立ちを解剖によって確認したからといって、その部分がどのような働きをなしているかという点まで正確に把握したことにはならないということ。例えば、器官(A)が器官(B)から生じてくることを解剖によって確認したからといって、器官(B)が器官(A)の働きの始原にあたりと考えるのは合理性を欠いているということ。
- (3) 「確定すべき事項」と訳したのは、古典ギリシア語では「ディホリスモス」(διορισμός)。この語は「境界を引く」「明確に区別する」という意味の古典ギリシア語の動詞「ディホリゼイン」(διορίζειν)の名詞形で、字義通りには「区分」「差異化」「定義」等を意味する。この個所では、体の各器官の働き等を特定し、それらを相互に区別するという目的のもとに「確定されるべき事柄」という意味を含むとい

- う理解に立って、以上の訳語をあてた。
- (4) 諸写本は「必要としている」(χρηζει) という動詞の前に否定辞(οὐ)を伝えているが、底本の校訂に従って削除する。
  - (5) 以下の論述には、神経や動脈に対して、それらの始原を明らかにすることを目的として行ったのと同じ実験(結紮用の糸による遮断)を静脈に対しても行ったということについての記述が含まれていない。ガレノスは、この種の実験は、肝臓が静脈の起始であることを実証するには、必ずしも有効でないと考えていた。ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説』第六卷第三章 V 520-521 Kを参照。
  - (6) この点については、ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説』第七卷第八章 V 645-646 Kを参照。
  - (7) 「膜」と訳したのは、古典ギリシア語では「メーニクス」(μηνιξι / 複数形は μηνιγγες)。「脳膜」のこと。この個所では複数形で用いられているので、「硬膜」(dura mater) および「軟膜」(pia mater) の両方を指していると考えられる。
  - (8) ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説』第七卷第三章 V 602 Kを参照。
  - (9) 大静脈のこと。本論考第三章注(40)および注(41)を参照。
  - (10) ガレノス自身は、(イ)の立場に立っている。本論考第四章 IV 668-669 Kを参照。
  - (11) 下大静脈の上のほうの部分。「肝静脈」という用語については、本論考第三章注(42)を参照。
  - (12) 「体のある部分がほかの部分より先に生成する」ことは「その部分が完成した体の管理のための始原として働く」と主張するための十分な根拠にはなり得ないということ。本論考第四章 IV 674-675 Kを参照。
  - (13) 「門脈」(本論考第三章注(5)を参照)から分岐して、これらの臓器に達している静脈の末端。
  - (14) 「臍静脈」のこと。上述の静脈の先端は、肝臓に達している「臍静脈」から分岐した静脈の先端であるため、それらを始原(アルケー)とみなすのは間違いであるということ。
  - (15) 大静脈のこと。
  - (16) 「外膜」と訳したのは、古典ギリシア語では「キトーン」(χιτών)。字義通りには「外套」の意味。「外膜」は血管の外側部分を「外套」のように包んでいるというわけである。
  - (17) 本論考第二章注(22)を参照。
  - (18) 本論考第二章 IV 656-658 Kの論述内容を指していると考えられる。
  - (19) 本論考第二章注(23)を参照。
  - (20) アリストテレス『形而上学』Δ巻第一章 1013a4 以下を参照。アリストテレスは「事物の始原」(アルケー ἀρχή) という語の意味用法の一つ(「事物が第一にそれから生成し、かつ生成した事物に内在しているもの」)について説明するために、その実例として「家の土台」「船の竜骨」を挙げている。さらに、動物の場合には「心臓」あるいは「脳」がそれにあたるとしている。これらに、ガレノスがこの論述個所で言及している「肝臓」を加えると、ガレノス自身が人体の三主要器官、すなわち「三つの始原(アルカイ)」と位置づけていたものがすべて揃うというわけである。
  - (21) 「自然」(ピュシス) というのは、「精液」(スベルマ) が持つ「製作者(デーミウールゴス)の理」にもとづいて、動物の体を全体にわたって、同時に形成していく始動的原理のこと。
  - (22) 肝臓に関しては、本論考第三章 IV 661 K および IV 668 K を参照。
  - (23) 「形態」(スケーマ σχήμα) や「位置」(テシス θέσις) のほかに、その部分の規模・大きさ・安定度、その部分が静脈、動脈、神経等を備えているかどうか等を挙げることができる。本論考第六章 IV 693-694 K を併せて参照。
  - (24) ストア派やペリパトス派の哲学者たちを指していると考えられる。本論考第四章 IV 674-677 K を参照。
  - (25) 動物の体を形成する原因にあたるものによって、最初に生成した部分のこと。ストア派やペリパトス派の哲学者たちの場合、心臓がそれにあたる。
  - (26) この点については、本章 IV 680 K を参照。
  - (27) 「[実体の] 流出」と訳したのは、古典ギリシア語では「アポロエー」(ἀποροή)。字義通りには「液体等がある場所から別の場所へ流れ出すこと」等の意味。この個所では、体の各部分・各組織の本質的な構成成分(最終的には「熱」「冷」「乾」「湿」という、いわゆる四基本性質に還元される)がそこから失われることを意味する。失われたものは、栄養によって補充される必要がある。ガレノス『人体の諸部分の用途について』第十六卷第十四章 IV 339-340 K を参照。

- (28) 本章注 (24) を参照。
- (29) 「呼吸」(アナプノエー ἀναπνοή) は、心臓の左心室に起源を持つとされる「生来の熱」(本論考第三章注 (63) を参照) を適度な状態 (= 「均衡調和 (シュンメトリアー συμμετρία) 」) に保つ等の重要な働きを担うとされている。ガレノス『呼吸の用途について』第五章 IV 510 K 等を参照。
- (30) 気管のこと。
- (31) この点については、ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説』第一巻第六章 V 188 K 等を参照。
- (32) ガレノス『人体の諸部分の用途について』第四巻第十三章 III 309-310 K の論述内容を指していると考えられる。
- (33) 本論考第三章注 (15) を参照。
- (34) 底本の校訂に従って「脾臓も」(καὶ ὁ σπλήν) という語句を補う。
- (35) 「二つの「囊 (のう)」」というのは、胆嚢と膀胱のこと。
- (36) 底本の提案に従って「下のほうに配置されている」(ὑποτεταγμένη) と読む。
- (37) 「余剰物」と訳したのは、古典ギリシア語では「ペリットーマ」(περίττωμα)。栄養が体内で血液に加工された後に生じる残余物のことで、一般には、尿や糞便を指すことが多い。この個所の「泥状の余剰物」については、ガレノス『人体の諸部分の用途について』第四巻第四章 III 271 K を参照。
- (38) ガレノス『人体の諸部分の用途について』第四巻第三章 III 269-270 K の論述内容を指していると考えられる。
- (39) 本章注 (24) を参照。
- (40) 本論考第四章 IV 674 K を参照。
- (41) 本論考第四章 IV 675 K を参照。

## 第六章

- (1) 「胚子を形成する原因 (アイティアー αἰτία) にあたるものは何か」という問いの解明。
- (2) ストア派やペリパトス派の哲学者たちを指していると考えられる。本論考第四章 IV 674-677K を参照。
- (3) ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説』第九巻第九章 V 789-792 K を参照。
- (4) 「知性」(ヌース νοῦς) を念頭に置いていると考えられる。事実、古代哲学においては「知性」は、しばしば、神と同一視されてきた。アリストテレス『動物の発生について』第二巻第三章 736b27-28 および『ニコマコス倫理学』第十巻第七章 1177b30 以下を参照。
- (5) 底本の校訂に従って「しかし、その一方で、偶然にもとづいて…も…ない」(οὐδὲ κατὰ τύχην) という語句を補って読む。
- (6) エピクロス (Epikouros, 341-270 BC) は、エーゲ海南東海域に位置するサモス島出身の哲学者で、デモクリトスの原子論 (atomism) を継承発展させ、世界とそこに存在するすべての事物は「空虚」の中を運動する原子の離散集合によって生成消滅すると主張した。
- (7) この点については、ガレノス『人体の諸部分の用途について』第十一巻第七章 III 864-876 K を併せて参照。
- (8) 「〔自動で動く〕見世物」というのは、古典ギリシア語では「タ・タウマタ」(τὰ θαύματα)。外部から動きを与えると、自動的に運動し続ける機械仕掛けの人形のこと。この個所のガレノスの説明は、動物の発生における運動の始原 (アルケー) を内包する「精液」(スベルマ) の働きを「自動で動く見世物」の動きに類比させて説明しているアリストテレスの論述 (『動物の発生について』第二巻第一章 734b4-17 および同書第二巻第六章 741b7-15) に依拠している。この点については、ガレノス『精液について』第一巻第五章 IV 532-533 K を併せて参照。
- (9) ストア派やペリパトス派の哲学者たちのこと。
- (10) 底本の校訂に従って「意見を表明する」(ἀποφίνασθαι) という語を補って読む。
- (11) 「自然に関する学問」と訳したのは、古典ギリシア語では「ピュシオロギアー」(φυσιολογία)。この語の動詞形「ピュシオロゲイン」(φυσιολογεῖν) は「自然 (ピュシス) について論じる」という意味。「哲学の創始者」ミレトス出身のタレス (Thales, c.624-c.546 BC) にさかのぼるとされる「自然哲学」の伝統に連なる学問のこと。
- (12) 底本の校訂に従って「典型的な実例 (パラダイグマ) を一つないし二つ」(ένός ἢ δευτέρου παραδείγματος) の直前に前置詞 (ἐφ') を補う。

- (13) この個所のように、体の特定の部分や器官の働きを一個の「動物」(Ζῷον)に譬えるという説明の方式については、アリストテレス『動物の諸部分について』第三卷第四章 666a20–22等を参照。
- (14) 底本の校訂に従って「説」(τῆς δόξης)の前に「以上の」(ταύτης)という語を補う。
- (15) 第二の説に従えば、「筋肉」というのは「神経」から発した動きを関節の接合部を形成している骨に伝える媒体としての働きをしていることになる。この説に対する反証として、ガレノスは、「筋肉」が「選択的判断にもとづく活動」(随意運動)を担っていることは観察を通して一目瞭然であるという点を挙げつつ、動物の遺体を用いた再現実験等を通して「筋肉」が「神経」に発する運動のたんなる媒体ではないということを明らかにしようとしている。
- (16) 本章注(8)を参照。
- (17) 本章IV 688–689 Kの論述における選択肢(A)に対する批判。
- (18) 「そこから」というのは、直前の一節の内容ではなく「人間が選択的判断にもとづく活動を行うときに動かす筋肉とその働きを理解しているわけではない」という論点(本章IV 690–691 Kを参照)を指していると考えられる。
- (19) 鳥類のこと。
- (20) この説に立っている人々が誰を指しているかについては、特定が難しい。
- (21) 動物の体の構造や働きに関する知識というのは、現実それらを形成した「魂」(プシューケー)に帰すのが当然であるということ。
- (22) 本章IV 687–689 Kの論述における選択肢(B)に対する批判。
- (23) ガレノス『人体の諸部分の用途について』第二卷第七章 III 119–120 K、同書第十六卷第四章～第六章 IV 278–293 K等を参照。
- (24) 底本の校訂に従って「十個の」(ι')を補って読む。
- (25) 本章IV 687–689 Kの論述内容を指していると考えられる。
- (26) 底本の校訂に従って、定冠詞の中性単数属格形(του)を補って「万有の」(του ὅλου)と読む。
- (27) 「図形的論証」(グランミケー・アポダイクシス γραμμικὴ ἀπόδειξις)というのは、「幾何学」(Γεωμετρία)の分野における論証のように「図形」を用いた演繹的推論にもとづく論証の形式のこと。これに対して「弁論家を用いる信念」(レトリケー・ピステイス ῥητορικὴ πίστις)というのは、弁論家が好んで用いるような、論証の裏付けのない一般的言説のこと。
- (28) 「スミュルナ」(σμίρνα)は「没薬」、 「スミーレー」(σμίλη)は「ナイフ」、また「スメグマ」(σμήγμα)は「石鹸」を意味する。これらの語の場合、語頭の二子音(σμ)が共通である。
- (29) 「理知的部分」(本章考第三章注(30)を参照)のこと。「魂」の成り立ちに関して、ガレノスは、基本的にプラトンの「魂の三部分説」に立っている。
- (30) 本章注(29)を参照。
- (31) この個所でガレノスが論及している「ある哲学者たち」の説というのが、中期プラトン主義の哲学者たちの見解をふまえたものであるということは、「形相(イデア)のほうに目を向けて」(ἀποβλέπουσαν πρὸς τὰς ιδέας)というプラトニズム特有の表現からも明らかであるが、具体的に誰の見解を指しているかを特定することは難しい。もっとも、この「ある哲学者たち」の説というのが、ガレノスの論及の通りであるとしたら、ガレノス自身がこの説にどこまで信を置いていたかは疑わしい。動物の体の形成過程を「永遠に魂を持って存在する素材(τὴν ἕλην ἔμψυχον οὐσαν ἐξ αἰῶνος)」による「イデア」を範型とした自己秩序化として解するとしたら、そこに「製作者」としての神が介在する余地は残されていないことになるからである。動物の体の形成過程を「有魂の素材」に帰すことについて、ガレノスは否定的である。この点については、本章最終部IV 701 Kを参照。
- (32) 「わたしたちを形成した魂」は、自らが形成したヒトの体と各部分の構造と働きについて明確な認識を持っているはずである。この魂を「わたしたちを管理している魂」(「理知的魂」)と同じであるとした場合、後者がヒトの体と各部分の構造と働きについて何も理解していないという事実と矛盾するという事になる。
- (33) 「要素的な音声」と訳したのは、古典ギリシア語では「ストイケイオーデース・ポーネー」(στοιχειώδης φωνή)。「要素的な」(στοιχειώδης)という形容詞は、古典ギリシア語の「字母」を意味する「ストイケイオン」(στοιχεῖον)という名詞に由来する。各「字母」に対応する要素的性格をもった音のこと。

- (34) 魂の「理知的部分」のこと。
- (35) ストア派やペリパトス派の哲学者たちの見解。本論考第四章 IV 674 K 以下の論述内容を参照。
- (36) ストア派を代表する哲学者クリュシッポス（本論考第三章注（27）を参照）自身は、この個所のガレノスの説明とは異なって「魂の情念（パトス πάθος）が存在している所に魂の指導的部分（ヘーゲモニコン ἡγεμονικόν）も存在する」という前提に立って「心臓が魂の指導的部分の座である」と結論づけたとされている。ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説』第八卷第一章 V 651 K を参照。
- (37) 本論考第三章注（33）を参照。
- (38) 本論考第三章 IV 672-674 K の論述内容を指していると考えられる。
- (39) 子供が両親（さらには父方または母方の祖先）に似た特徴を持って生まれてくることの原因をめぐる問いは、男女（雄雌）の性別の決定をめぐる問いとともに、ヒポクラテスの時代から、医学者たちや同時代の自然哲学者たちの中で論争の対象となってきた。医学者たちは「精液は両親の全身から出てくる」という考え方（イギリスの生物学者チャールズ・ダーウィン（Charles Darwin, 1809-1882）が提唱した「パングネシス」（汎生説）の祖型にあたるもの）に立って、生まれてくる子供が両親のうちのいずれかの特徴を受けついでいることを、両親の全身または各部分から放出される「精液」の量と因果的に関連づけることによって説明した。「ヒポクラテス医学文書」中の医学書の著者のうち、『生殖について』・『子供の自然本性について』・『疾病について』第四巻から構成される一連の論考の著者（本論考第一章注（6）を参照）のほかに、『神聖病について』および『空気、水、場所について』と題する論考の著者は、以上の考え方に立っている。これに対して、アリストテレスの発生理論においては、女（雌）が胚子を形成するための「素材」（ヒューレー）にあたるものとして「月経血」（または「それと類比的なもの」）を提供するのに対して、男（雄）は「精液」を通して、女（雌）から提供される「素材」において「形相」（エイドス εἶδος）を実現させるための運動の始原（アルケー）を提供するとされている（アリストテレス『動物の発生について』第一巻第二十章 729a9 以下等を参照）ので、医学者たちの考え方とは真正面から対立する。ガレノス自身は、これらの医学者と共通の考え方に立つことによって、親子間の類似性（ホモイオテース ὁμοιότης）の原因をめぐる問題に対応している。
- (40) ガレノスと同時代のペリパトス派の哲学者たちの見解。ガレノス『精液について』第一巻第三章 IV 516-517 K を参照。
- (41) アリストテレス自身に帰すことのできる見解。本章注（39）を参照。因みに「雄が運動の始原を含む精液を道具（オルガノン ὄργανον）として用いる」という考え方については、アリストテレス『動物の発生について』第一巻第二十二章 730b19-22 等を参照。
- (42) 底本の校訂に従って、否定辞（οὐ）を削除する。
- (43) 「精液」（スベルマ）の実体を「氣息」（ブネウマ）（本論考第三章注（21）を参照）とみなすという考え方は、ストア派において顕著である（ストア派の創始者ゼノン（Zenon, c.335-c.263 BC）断片 I 128 [SVF]、クリュシッポス断片 II 741-742 [SVF] を参照）。その一方で、アリストテレス自身も「精液」の持つ生殖能力を「氣息」（ブネウマ）という物質に帰している。アリストテレス『動物の発生について』第二巻第三章 736b33 以下を参照。
- (44) これに該当する論考は、現存するガレノスの著作中には見出せない。一部には、主著『ヒポクラテスとプラトンの学説』第一巻冒頭の散逸した論述部分を指しているとする意見もあるが、散逸した別の論考を指していると考えるのが妥当である。
- (45) これに該当する論考は、現存するガレノスの著作中には見出せない。なお、ガレノス『自らの学説について』第十三章 IV 757-758 K に、この散逸した論考の内容について言及していると思われる一節が確認される。
- (46) 「植物的魂」（ピュティケー・ブシューケー φυτική ψυχή）については、本論考第三章 IV 665 K の論述内容を参照。「植物的〔な部分〕」という表現については、アリストテレス『ニコマコス倫理学』第一巻第十三章 1102a32 以下を参照。もっとも、アリストテレスの「魂」論においては、この魂は「栄養摂取のための魂」（トレプティケー・ブシューケー θρεπτική ψυχή）と呼ばれるのが一般的である。本論考第三章注（28）を参照。
- (47) 本論考第三章注（29）を参照。
- (48) 本論考第三章注（27）を参照。

- (49) 「全宇宙に浸透している魂」というのは、いわゆる「宇宙靈魂」のこと。プラトン『ティマイオス』篇第八章 34b 以下、同書第八章 36d 以下を参照。
- (50) 底本の校訂に従って、接続詞 (δέ) を補って読む。
- (51) 「ドクグモ」と訳したのは、古典ギリシア語では「バランギオン」(φαλάγγιον)。咬まれると、傷口に痛みをおぼえたり、傷口が腫れたりするクモの総称。アリストテレス『動物誌』第四卷第十一章 438a27 等を参照。
- (52) 「コーノプス」(κόνωψ) というのは、ブユの類のこと。ヘロドトス『歴史』第二卷第九十五章、およびアリストテレス『動物誌』第四卷第七章 532a14 等を参照。
- (53) 「クサリヘビ」と訳したのは、古典ギリシア語では「エキドナ」(ἔχιδνα)。アリストテレス『動物誌』第三卷第一章 511a16 等を参照。
- (54) 「蛆」と訳したのは、古典ギリシア語では「スクーレークス」(σκώληξ)。有節動物(昆虫等)の幼虫にあたるもの。アリストテレスの動物学では、有節動物の場合、先ず「蛆」が生成して、これが「卵」(蛹)に変化した後、そこから完成した動物が生まれるとされている。アリストテレス『動物の発生について』第三卷第九章 758a29 以下等を参照。
- (55) 「ヘルミンス」(ἕλμινς) というのは「サナダムシ」「カイチュウ」の類。アリストテレス『動物誌』第五卷第十九章 551a8 以下等を参照。
- (56) 「アスカリス」(ἄσκαρις) というのは、体内寄生虫のうち「ギョウチュウ」の類のこと。アリストテレス『動物誌』第五卷第十九章 551a10 等を参照。
- (57) 本章注 (31) を参照。
- (58) 神経(および筋肉)、動脈および静脈をそれぞれ経由する運動(キネーシス)というのが、脳、心臓および肝臓という体の三主要器官をそれぞれ起始としているという点については、本論考第五章 IV 679 K 以下を参照。
- (59) この個所で、ガレノスが「多くの論考」として念頭に置いている論考のうちの代表的なものとしては、『ヒポクラテスとプラトンの学説』を挙げることができる。この点については、同書第九卷第九章 V 793 K 以下を参照。これに対して、『魂の種類について』(Περὶ τῶν εἰδῶν τῆς ψυχῆς)と題する論考は、現存するガレノスの著作中には見出せない。おそらく散逸したものと考えられる。以上の論考については、ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説』第九卷第九章 V 803 K で言及されている。因みに、この論考は、ガレノスが『自らの著書について』XIX 46 K で挙げている『魂の諸部分とその能力について』(Περὶ τῶν τῆς ψυχῆς μερῶν καὶ δυνάμεων)と題する論考と同一であると思われる。
- (60) 本章注 (27) を参照。

## [追記]

ここに、わたくしの個人的な思いを記すことをお許し願いたい。わたくしの恩師の一人、廣川洋一先生(筑波大学名誉教授)が、2019年11月8日に亡くなられた(享年83歳)。廣川先生は、わたくしが日本学術振興会特別研究員(PD)の資格で、1991年度から1992年度の2年間、筑波大学哲学思想学系において先生の研究指導を受けて以来、研究の師の一人として仰ぐ存在であった。「恩師の学恩に報いる」などということは、わたくしにとっては、一生かかっても難しいことであるが、廣川先生の学恩に対するささやかな感謝のしるしとして、この翻訳注解を捧げる。